

書評

呉叡人 著

**『台湾、あるいは孤立無援の島の思想：
民主主義とナショナリズムのディレンマを越えて』**

みすず書房、2021年、464頁

台湾本土左翼の思想－運動

中村 平

はじめに

本書は2016年に台湾で出版され、2021年に日本で翻訳出版された（みすず書房、駒込武訳）。おおまかに2010年代から現在の日本の台湾についての出版状況を見ると、台湾を殖民地化した日本を著者の呉のように捉え、その後の国民党支配と現中国の抑圧という困難な状況を踏まえつつ、歴史的不正義について脱殖民的（decolonial）に意識して書いているものの少なさに思いついた¹。専門書はともかく、一般向けに書かれた書籍で、特に日本が台湾を殖民地化したことを反省的に振り返り、21世紀の東アジアをめぐる平和をどう共にこの地域の人間が作っていくか、という視点で台湾論を展開したものの圧倒的な薄さがある²。後述するようにこのことは、本書が日本と日本で台湾研究する者にも呼びかけを行っていることに関わる。

書評者である私は、帝国日本の殖民地の歴史と、人びとが実際にどう考えているのかを知りたいと思い、初の民選総統選挙実施と中国による台湾海峡へのミサイル発射により騒然とする1996年に台湾に渡り、台湾先住民タイヤルと日本殖民主義に関する修士論文を書いた。2001年に日本に戻り、その後2003年からの一年を台湾で過ごし、以降は短期間の訪問を続けている。その間、韓国でも4年居住するというポジションからこの文章を書いている。多感な20代の5年間を台湾で暮らしたことは私の自己成型に影響し、高地先住民ほかの集落に通いながら、民主進歩党陳水扁政権誕生（2001年）の熱気を肌で感じた。これまで計11年を日本以外で暮らしてきたと同時に、東京の下町から徴兵されて中国戦線で人を殺めた祖父という、殖民者としての家族史を持っている（中村2022bを参照）。

ポジショナリティについて

ポジショナリティに言及するのは、世界と歴史と文化を語る諸言説の齟齬や差異がどこから生

じるのか、また歴史を含んだ立場性が自らの思考にいかに関与を及ぼしているのかに敏感である必要があるからである。日米安保・軍事同盟を結ぶ日本の国籍を持ち、男性でアカデミズムに職を持つ、台湾先住民と日本殖民主義について文章を書き、現在は広島在住で平和学にも携わる者。呉が「わたしの島」(10頁)台湾の有機的知識人(グラムシ)としてその歴史と文化、社会について語るのであれば、以上のようなポジションを持って本書を読む私は、「日本」との何らかの連累や責任関係の上において発言しなければなるまい。特に呉が、日本の殖民主義や右派の日台連合・合作などについて具体的に言及しているのであるから、それはなおさらである。世界と歴史と文化を語るに際し、人は誰しも当事者性を持っており、そのことの自覚抜きに展開される日本の台湾論は多い。

ポジションナリティと当事者性の自覚が、しかし他者とくに過去抑圧し侵略してきた他者に迎合するものでもない、ということも明らかなことである。例えば呉は、日本左派の親中的な認識と姿勢についても厳しく問うている(2019年11月21日朝日新聞、後述)。日本国籍保持者の大部分が日本帝国(主義)の末裔であるから、その侵略行為を反省するあまり中国の主張は何でも聞くということは、違おうだろう。日本に対してであれ中国に対してであれ、殖民主義批判の基線から歴史と文化を考えている。本日本語訳書は、そうした自己と自己を成型してきた社会への反省を、さまざまなポジションにある個々人に問うものである。

本書の構成を以下に掲げる。

フォルモサ、香港、日本に献げる——日本語版への序文

序 幸福な島にて

I 窮境を脱するために——歴史のヴェールをはがす

1 台湾ポストコロニアル・テーゼ——A Partisan View

2 民主化のパラドックスとディレンマ?——台湾ナショナリズム再考

3 国家建設、内部植民と冷戦——戦後台湾における国家暴力の歴史的文脈および移行期正義問題の根源

II 窮境に嵌まりこむ——帝国の狭間で

4 賤民宣言——あるいは台湾の悲劇の道徳的意義

5 比較史、地政学、そして日本において寂寞の内に台湾を研究するという営みについて——ベネディクト・アンダーソンへの応答

“De courage, mon vieux, et encore de courage!”——ベネディクト・アンダーソンへの手紙

III-1 再び、窮境を脱するために——ニーチェのカント主義者の夢想

日本「我は一個の他者である」

6 反記憶政治論——日台関係の再構築にかかわる歴史学主義の観点

7 賤民の救済と過去の償い——「村山談話」をめぐる一台湾人の省察

8 最も高貴な痛苦——大江健三郎『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』における日本への郷愁世界「虐げらるるものの解放、沈めるものの向上、自主独立なるものの平和的結合」

- 9 道徳の政治的基礎を論ずる——南アフリカと台湾との移行期正義モデルにかかわる初歩的比較
- 10 琉球共和国に捧ぐ——台湾人による松島泰勝『琉球独立への道』読解
- 11 リリパット人たちの夢——香港ナショナリズムにかかわる思索ノート
- 12 歴史と自由の弁証法——香港における「国民教育科」推進問題をめぐる内省
- 13 ユートピアへの航行——「小国の魂」について
- III-2 再び、窮境を脱するために——社会的意志の創造
- 14 社会運動、民主主義の再定着、国家統合——市民社会と現代台湾における市民的ナショナリズムの再構築 (2008-10 年)
- 15 黒潮論
- 付録
- 1 民主、平和、守護台湾 (1996 年 3・22 世界キャンドル守護台湾民主運動宣言)
- 2 野イチゴをしてわれわれを団結せしめよ (2008 年野イチゴ運動に捧げる詩)
- 初出一覧、戦後台湾政治史関係年表、訳者あとがき

書名と訳語などについて

書名の訳語は、『台湾、あるいは孤立無援の島の思想：民主主義とナショナリズムのディレンマを越えて』であるが、原題『受困の思想：台湾重返世界』とは差がある。これは想定される日本語読者へ向けてのものと見えよう。原書の副題は、「世界に再び還る台湾」とも訳しうるものである。この副題について、第 2 章「民主化のパラドックスとディレンマ？」と密接に関わり、日本語で「民主主義とナショナリズムのディレンマを越えて」としたのは、ナショナリズム批判の瀰漫化した日本で読者を獲得せんがためだろう。私はある台湾人の台湾史研究者から、過去の帝国であり確固とした国民国家である日本に守られている知識人の立場から、台湾の未完の国家形成（独立）とナショナリズムは果たして批判し得ようかと言われたことがある。

またさらに言えばこの「還る」は、大江健三郎論（第 8 章）における『沖繩ノート』の、「このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」に関わっているともとれる。この「かえる」は、「変える」であり「還る／帰る」なのではないか。呉は台湾の声が聞かれるような、世界との関係の再構築を切望しているのである。第 13 章「ユートピアへの航行」の「航行」にも重なってくるだろう。

本訳書において多くの訳注が付されていることは、固有名や専門用語の理解を即座に深めてくれる助けになっている。訳者の労に感謝したい。なお広島在住の渡田正弘さんにご示唆いただいたことだが、第 6 章の「台湾人元日本兵の権利を勝ち取る会」（136-7 頁）は誤りで、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」が正しい名称だと思われる。同じ場所の林景明さんの訳注には「台湾台南生まれ」とある（160 頁）が、林景明さんの著書によると「1929 年、台北県の生まれ」（1970）、「台北県新莊郷山脚（現在は泰山）」生まれ（1997）とある。なお林さんの読みは、「リム・

キン・ビョン」(1970)、「Lim Kingbing」[日本語読み：りん・けいめい](1997)である。

本書の主張と簡単な要約

本書は自認するように、「台湾本土左翼」(411頁)の思想—運動といえよう。本書の主張と要約については、訳者による的確な「あとがき」ならびに、すでにいくつかの良質の書評が出ている(陳 2021、藤原 2021a, b、加藤 2021)。まずはそちらをご覧ください、ここでも簡潔にまとめておこう。

本書は、主題たる台湾ナショナリズムの視座からこの120年ほどの台湾史を、①日本による植民地支配、②冷戦期米国覇権下の国民党統治(1950-89年)、③ポスト冷戦期の新自由主義的趨勢下における米国の覇権(1990-2004年)、④中国の台頭と新帝国主義の時代(2005年—)と、大まかに振り返る(第15章)。この間、台湾は「諸帝国の狭間」において「断片」化され、多くの血が流され、そこに生きて自由と正義を希求する者たちや、体制に抵抗する者たちにとって孤立無援状態に置かれてきた。そこでは、清帝国と日本、国民党による連続的殖民と、宗主国(外来政権)／漢族移民／先住民族という共時的支配構造における重層的な植民地化が特徴的である(第1章)³。別の表現を採れば、「百年以上にわたってもっぱらアメリカと日本に依存する発展モデルに依拠し、現在においてなお自覚的にも無自覚的にも現代中国の発展モデルに依存してきた台湾」(312頁)と対象化することによって、そこからの航行とその変革を希求しているのである。

孤立無援の状態に置かれた台湾人たちはしかし台湾意識を形成し、反殖民主義の思想を育成しつつ民主化闘争を闘ってきた。特に台湾の社会運動と付随する市民的ナショナリズムを分析する第14章で論じられるように、民主主義を発展させた市民社会を成熟させてきたのである。台湾におけるナショナリズムは市民的ナショナリズムと呼べるものであり、その内実は民主化運動に大きく依っている。

同時に本書は、台湾が世界に再び還るために探究されるとも言ってよい、南アフリカ論(第9章)、琉球—沖縄論(第10章)、香港論(第11、12章)、ノルウェー論(第13章)を展開している。膨大な本書の要約はそれだけで字数超過となるため、本稿では以下、本書の主張をたどりつつコメント的な批評を行う。

台湾民族あるいは台湾ナショナリズム

呉の民族とナショナリズム論について、台湾ポストコロニアル・テーゼ(第1章)は以下のよう述べている。「われわれは台湾を、(自然的な)原住民族であり、(文明的な)中国であり、(平和的な)日本であり、(友愛的な)漢族であり、同時に(民主的で自由な)西洋でもあるというような——これらすべての普遍的、進歩的な人道主義の価値観の総和とらしめるべきである」(27頁)。これは、通常のナショナリズムのイメージからは遠いかもしれない。これまでもハイブリッドなネイションのイメージはあったらうかという問いが浮かぶが、この点は、H・バーバの所

論との関係性をより明らかにする方向性もあろう（バーバ 2009 など）。呉は有機体的な民族概念を放棄し（37-8 頁）、非本質主義的なナショナリズムを主張する。ここでは、E・サイドの遡行やアフィリエーション概念の重なりを見ることも可能である⁴。

台湾人の有機的知識人たる著者による台湾民族とナショナリズムの主張は、本書の原題サブタイトル「世界に再び還る台湾」ということに重なって、世界に呼びかけ「発声」していると聞き、読む必要があるだろう。サブタイトルの訳出の仕方と関わり、この点は日本語読者に注意を喚起したい部分である。

市民的ナショナリズムと民主主義の「ディレンマ」

訳書のサブタイトル「民主主義とナショナリズムのディレンマ」についてであるが、呉は「民主化のパラドックスとディレンマ？」（第2章）と問いつつ、その解答は本書において明快である。本書の言う「民主化のパラドックス」とは、民主化以降、それまで押さえつけられてきた台湾アイデンティティ（中国語で認同）が高まりを見せ、中国（あるいは中華）アイデンティティと異なる力を可視化させ、それが台湾におけるアイデンティティポリティクス（というパラドックス）を生み出したと言えよう。あるいはこのアイデンティティの問題が民主化を後押ししたとも言えるだろうか。いずれにせよ敵対性が明確になり、それをいかに統合／和解させるかが課題となってきたわけである（この辺りは陳光興が1990年代から分析していた）。

呉はこれについて、第2章で以下のように述べている。「民主化が国家への帰属意識の分裂を誘発し、国家への帰属意識の分裂が民主主義を社会に根付かせるための前提、すなわち政治的秩序の境界線にかかわる共通認識をかえって掘り崩してしまうことである」（36頁）。ここに言う「国家への帰属意識」は原文で「国家認同」であり、ほぼ国家アイデンティティと言いかえられるものだ。境界線に言及する意味は、「台湾は（中国でなく）台湾に」、「中国は中国に」帰属意識を持つという「中台」間の境界線ということだろう。しかしこの認識は、本書に散見される民族とナショナリズムの非本質主義的で脱構築的な思想－運動からは、やや外れたものであると考えられる。民主化により自由なアイデンティティや意見が表明できるようになったことにより、一見混乱したハイブリッドな状況が台湾で生まれてきたこと自体が首肯されるものであり、知識人はその意味を言語化し可視化する責務を負うのではないか。（台湾社会にも存在する）中国ナショナリズムといかなる対話を行っていくかという見通しは、議論を呼ぶ難問であるが肝要な問題であろう。

以上のパラドックスとディレンマについて、本書の解答は、新しく柔軟な台湾ナショナリズム論を当てるものである。中国ナショナリズムの側も、長期的には今後同様のことを主張する可能性もあるが、呉にすれば、一定の政治的文化（つまり民主主義）が共有されない限り、中国ナショナリズムにアイデンティファイすることは難しいということになる。呉はこのようには書いていないがそう推測されよう。

また郷愁やノスタルジアについて大江論では論じられるが、黒潮論（第15章）を軸とした台

湾ナショナリズムのそれについては対象化されないようだ。むしろそれをなぞっているくらいもある（「黒潮の流れに耳をそばだてよ」413頁など）。これに対して中国ナショナリズムの側からは、「黄河」などのシンボルに依拠して、台湾ナショナリズムの黒潮論を包摂したりそれに対抗したりするかもしれないが、そのような対立は本書の望むところではないはずだ。そのような危険を回避し超克する論理と文体、美学とは何だろうか。非有機体的な民族概念は、こうしたノスタルジアといかなる関係を切り結ぶのか。ナショナリズムと美学（美美学 aesthetics）については多くの研究があるが（柄谷 2004、山田 2001）、本書に時折顔をのぞかせるやや感傷的な文体にもそれが表出されている。これが呉ひとりの裡から広がって政治資源化し大衆化する政治運動になると、感性的なもののパルタージュ（分有）という問題に関連し議論になっていくと思われる（ランシエール 2009）。何にノスタルジーを感じるかは、社会的に構築されつつ、ナショナリズムにとって活力と資源となる現況がある。ナショナリズムのディレンマであろう。

呼びかけられる日本と日本の台湾研究

本書の原書が 2016 年に出版されて以降、同年当選した蔡英文総統が 2020 年も当選し二期目に入った。この間、2019 年に同性婚が政府により承認されたほか、本書に関わる重要な出来事としては、2019-20 年の香港民主化デモとその鎮圧、2020 年 6 月の香港国家安全維持法の中国での可決、それによって「独立」の旗を香港で掲げた人物が逮捕されるという事態に至ったことが挙げられる。そして 2022 年にロシアがウクライナに侵攻し、2023 年 3 月の時点では台湾で、中国語で言うところの「備戦」（戦争への準備あるいは軍備拡張）をめぐる議論が起きている（陳弱水 2023 など参照）。蔡のこれまでの任期にあってはホンジュラスなどが断交し、中華民国と国交のある国は 13 まで減った（2023 年 3 月時点）⁵。2016 年時点で比べ明らかに悪化したといえるこうした状況下で、台湾が「世界に再び還る」ことを企図した本書は、「日本社会と世界の市民社会の応答責任にかかわる課題」（訳者あとがき、449 頁）を、強度を増して依然提起していると感じてよいだろう。

全米民主主義基金などに範をとった「民主的平和のための日本基金」創設を日本社会に向けて提唱する村山談話（1995 年）論（第 7 章）では、以下のような言明がなされている。

過去のあやまちを反省する日本が東アジアにおける民主主義を促進する共同事業に参加して（村山談話の）誓約を履行することは、ほとんど必須の条件となっている（182 頁）。

呉の提言は率直であり首肯されるものだ。本章が出版された二年後の 2015 年に出された戦後 70 年安倍談話が、村山談話から大きく後退したものであるという現状においてはより然りであろう（中村 2020 も参照）。そして侵略の被害を与えた中国に対して、日本社会の行うべき関与について呉は指摘する。

急激に変化していく中国のなかで国家と市場の両方から犠牲を強いられている人々を助け、癒すことのできる公共的なプロジェクトを誠実かつ堅実に、忍耐強く継続すること、そしてそれをとおして中国の人々が自主的な市民社会を建設する手助けをし、ともに働くこと——これによってのみ日本は、歴史において深く傷つけられ、長きにわたり日本を拒絶してきた中国の人民から確実な信頼をもって迎え入れられるだろう (189 頁)。

本書にある、市場と国家の論理から一線を画した、脱殖民的かつ民主的な市民社会の交流と連帯という視角は一貫したものだ。第5章では、日本における台湾研究の独自の発展に言及している。曰く、「日本における台湾研究は、台湾を世界へと接続する架け橋であると同時に、台湾が自己へと回帰するための架け橋」でもあると (101 頁)。こうして日本の台湾研究に触れつつ、呉はその意味をさらに問う。「なぜ、そしてどのように、日本において台湾を研究するという営みが日本にとっても重要なのでしょうか」。つまり、殖民主義に起源を持つ日本の台湾研究の堅固さは、殖民地支配への意志が働いているものか、それともある種の道徳的な意識が作用しているのかと (102-4 頁)。

こうした大きな問いには、さまざまなレベルの応答が考えうるものの、ここで呉が指摘していることは、近代台湾が日本という「仲介者」抜きには形成されえなかったという歴史的関係性である (103 頁)。殖民近代 (colonial modernity) 的問題と言いかえてもよい。私はここに G・C・スピヴァクが言う、レイプされて生まれた子としてのポストコロニアルということ想起する (Spivak 1996: 19)。これが比喩ではないことは、日本軍警により「慰安婦」にされた (先住民を含む) 台湾人のことや (柳本 2000, 2001)、台湾出兵 (1874 年) と日清戦争後期の 1895 年から 50 年にわたる殖民地支配における無数の抵抗と決起と、それへの徹底的鎮圧を想起していただければと思う (伊藤 1993, 中村 2006, 周 2013 など参照)。日本に応答が期待されていることの最重要のひとつには、暴力の問題を含めたこの日本殖民主義の解明と、そこからの脱却 (脱殖民化) ということが関わっているはずである。

このことに関わりながら一方で、訳者が本書は「自己同一性の揺らぎを媒介として」日台の新たな連帯を探ると表現している (445 頁) ように、日本と台湾は (そして他の万物も然りであるが) 二項対立的・排他的に構築されているわけでもない。台湾が日本と切り離し得ないように、第8章における広島に被爆者の荘司雅子は、台湾人の荘雅子でもある。「彼女は台湾を失うことなく、だがかえって日本に回帰した」 (232 頁) の「回帰」には、上述した「還る」と「変える」が重ねられていよう。呉はこの章で、大江健三郎の筆記に台湾や殖民地が対象化されていないことを痛烈に批判し、日本国籍を持つ者に向けても「日本」を脱構築する。

ところで呉は 2019 年に朝日新聞のインタビューに答えて、日本の特にリベラル派や左派の中国認識の甘さを指摘している。資本が蓄積され、国内矛盾が非民主主義的に抑圧される中で、多くの帝国主義国家がその道をたどったように、中国も対外膨張により国内矛盾を隠蔽する、それが「一带一路」の本質だと言うのである。そのうえで、「日本の中国観には戦後の親中メンタリティーが残っている」とし、日本の中国認識について以下のように述べる。

共産党の革命を高く評価し、東アジア現代史を中国の視点で見えていませんか。台湾もその視点で見えていませんか。「中国の脅威」は右派言論がつくる虚構だと思いませんか。日本の、特にリベラル派は中国に対する自前の理論、新たな論述を打ち出さなくては。

卑見では、日本帝国主義・殖民主義への批判の物差しを、そのまま中華・中国殖民主義に当てはめればよいのである。こうした考えもあり私は職場（広島大学）で、多くの中国人学生をも受講者に持つ大学院共通科目において、呉に講演会を依頼したことがある（2018年4月）。その時の講演タイトルは「帝国のはざまに：台湾における国家形成と民主主義」であり、本書に密接に重なるものであった。当時すでに呉は香港への入国を拒否されていた。

第6章で論じられるように呉は日台の連帯について、「右翼民族主義者同盟のマキャベリズムと左翼反独立派同盟の道德主義の持続的な対峙」によって、日台連帯の形式の選択肢は「大幅に狭められ」という認識のもと、「平等で健全な日台民主進歩派同盟」締結の道を説く（135, 156頁、155頁も参照）。そこにおいて、日中の殖民主義を対象化しうる歴史認識は鍵となる。

藤原辰史の「もしも日本が『小さな島じま』の一つとしてやりなおせるなら」（2021a）における呉への応答も、傾聴に値しよう。藤原は本書から、米中二大強国のはざまにあって永世中立を提唱する台湾ナショナリズムと、米軍基地撤廃と琉球人民の自決を支持する連帯について指摘し、日本を列島の島じまの集まりという視点から捉えなおして、台湾と琉球の島じまの連帯への参画を志向する。巨大技術に依存した「重装備」の思想ではなく、「軽装備」で外交を盛んにし自然の力を利用しながら生活を豊かにすることで、既存の米中のあり方に与しない方向性を示す。資本主義発展をほどほどにして軍拡を抑えていくということである。

台湾先住民族の立場から読む

本書を、民族・階級・ジェンダー（LGBTQ）で台湾を割るという視点から、さらには複合差別やインターセクショナリティという視点から再分析できないか。膨大な領域や問題が議論されねばならないだろうが、ここでは本書の内容以外にも呉が台湾先住民族史に学んでいることを踏まえたうえで（呉 2008, 2009）、先住民族の立場について少し触れたい。2016年の原書の出版以降、蔡英文総統の台湾先住民族への謝罪が同年8月にあり、同年に「原住民族歴史正義與轉型正義委員会」が設立され、先住民族への移行期正義（轉型正義）の実践が期待されている。

本書では、台湾民族を漢民族と先住民族から構成されるものとする（第1章）。いわば台湾民族に先住民族を包摂する関係性が述べられているのだが、卑見では、台湾先住民にとりこの間のたたかいは、「台湾人」としてのたたかいというより、台湾先住民族としてのたたかひである。さらには、台湾先住民女性としてのたたかひである（中村 2019b）。台湾先住民族としてのたたかひということについては、「原住民族独立」（「原独」）という主張も出ている（中村 2020）。中国ナショナリズムから見た台湾ナショナリズムと、台湾ナショナリズムから見た台湾先住民族ナ

シヨナリズムという、ある種パラレルな問題がここには登場する。本書の視角はこれをいかに語りうるのか。

私は北部山地の先住民集落で、ある先住民青年の語りを聞いた経験がある。陳水扁時代に副総統呂秀蓮の唱えた台湾の軍備拡張に際して、彼は「どうせ自分たちが前線に立たされる」と吐き捨てるように言ったのだ。その時、「台湾人」も一枚岩ではないとリアルに体感させられた。この発言には、高地先住民の戦争についての歴史記憶が折り重なっているように感じられる。彼の暴力の予感、2023年現在も解消してはいないに違いない。

前掲の藤原は別所(2021b)で語っている。「今日の香港は明日の台湾。軍事制圧の悪夢にうなされる台湾の知識人が、外交と文化と正義で大国に立ち向かおうとする姿に触れ、思想を表明した者に冷笑を浴びせ、傍観を冷静さと履き違える日本の知識人のぬるさを感じずにはいられない」。軍備拡張や外国からの支援の問題を含め、呉が直面し提起する問題は激論を呼ぶものではあるが、各々のポジションを意識しつつ、学術を含めた場が冷静な議論と相互理解のプラットフォームを開いていけるよう私も努力したい。

他の論者との節合可能性

本書は、台湾に関する多様なナショナリズム論や社会文化(理)論への節合可能性に開かれていいる。加藤直樹(2021)は本書への書評で、以下のように言及している。

著者は台湾独立左派の位置にあるが、私はその論敵である反独立左派の陳光興(チェンゲンシン)著『脱帝国：方法としての東アジア』(以文社)からも、多くの刺激を受けた。私たちは、「自主の民の平和的結合」のために日本の脱「帝国」はいかに可能かという問いを、自らに向けるべきだろう。

首肯される主張である。加藤が開くように、日本語圏において台湾ナショナリズムや台湾との関連で東アジアの平和と和解を論じる著作は、上の陳光興のほか、台湾ナショナリズム(丸川2010)、日本人になること(チン2017)、東アジアにおける感情の政治と和解(チン2021)など、この間多くの蓄積を見せてきた。台湾人の立場からの探究である洪郁如『誰の日本時代』(2021)は、ジェンダーと階級性により切り込んでいる。私も力及ばずながら、一見親日的な高地先住民の日本語世代の日本語による語りの裏に、暴力の記憶が聞き取れることを記している(中村2018)。冒頭に触れたように、ポストコロニアルともかかわるこうした研究成果が、今後は台湾に関する入門書にも反映されていくこととなるだろう。林志弦『犠牲者意識ナショナリズム』(2022)も中台関係論との節合が求められよう。

本書が触れるところもある「脱構築」は、民族主体を考えるひとつの重要な切開点となりうるかもしれない。抵抗の政治において立ち上げられる(言祝がれる)主体について崎濱(2022)の議論は、沖縄人という主体(言説)をめぐって脱構築論を展開している。抵抗において言祝がれ

る主体が、常にすでに脱構築されているということであり、述部（述語）がパフォーマティヴに主体と主語を更新し続けるということではないのか。これは呉による台湾人主体論にも強く重なるものであろうし、後続の私たちに残された課題である。紙幅に限りがあり本稿の範囲を超えるため、ここではこれ以上の議論は行わず別稿を期したい。また、歴史経験の相互理解ということに関わっては、私はオートエスノグラフィという方法論にも関心を寄せている（中村 2022b）。

おわりに

日台進歩派同盟を希求する呉の呼びかけに、日本語圏知識人はいかに応えうるか。「台湾有事」の題目のもと、自衛隊の南西シフトなど岸田政権（2021年～）下で軍拡の流れが作られ、呉の描いた方向性と乖離する中で、その問いはますます重い。歴史研究の領域では、二二八事件と白色テロにおける、日中戦争のトラウマ的影響も指摘され始めた。第二次世界大戦後の台湾での衝突にも日本による暴力の問題が影を落としているようなのだ（李 2022）。一方で中国白紙抗議運動やウィグル、チベット、内モンゴルの抗議運動が日本でも行われている（王編 2022 など参照）。歴史を含めたこれら進行中の複雑な事象を節合しつつ、台湾を孤立させ台湾ナショナリズムを自閉化させないために、いかなる連帯を作っていけるかという課題を話し合う必要性に今直面しているし、日本台湾学会の諸活動もその責の一端を担い得よう。（2023年4月24日原稿提出）

引用・参考文献

- Spivak, G-C. 1996. "Bonding in Difference, Interview with Alfred Arteaga (1993-94)," Donna Landry and Gerald Mclean eds., *The Spivak Reader*, Routledge, p.15-28.
- 伊藤潔 1993 『台湾：四百年の歴史と展望』 中央公論社
- 林志弦 2022 『犠牲者意識ナショナリズム：国境を超える「記憶」の戦争』 澤田克己訳、東洋経済新報社
- 王柯編 2022 『「友好」のエレジー：中国人がみる「日中国交正常化五十年」』 藤原書店
- 加藤直樹 2021 「「諸帝国の狭間の断片」から提示された新しい思想：きんようぶんか『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』」 『金曜日』 29 (18): 54 (5月14日)
- 柄谷行人 2004 『ネーションと美学』 岩波書店
- 川口隆行 2017 「日本における台湾／台湾における『日本』」、水羽信男編『アジアから考える：日本人が「アジアの世紀」を生きるために』 有志舎、85-106頁
- 洪郁如 2021 『誰の日本時代：ジェンダー・階層・帝国の台湾史』 法政大学出版局
- 周婉窈 2013 『図説台湾の歴史』 増補版、濱島敦監訳、平凡社
- 崎濱紗奈 2022 『伊波普猷の政治と哲学：日琉同祖論再読』 法政大学出版局
- 胎中千鶴 2019 『あなたとともに知る台湾：近現代の歴史と社会』 清水書院
- チン、レオ 2021 『反日：東アジアにおける感情の政治』 人文書院
- 2017 『ピカミング「ジャパニーズ」：植民地台湾におけるアイデンティティ形成のポリティクス』 勁草書房
- 陳虹彪 2021 「書評 呉叡人著・駒込武訳『台湾、あるいは孤立無援の島の思想』」 『植民地教育史研究年報』 24: 203-210
- 中村平 2018 『植民暴力の記憶と日本人：台湾高地先住民と脱植民の運動』 大阪大学出版会
- 2019a 「書評 レオ・チン著『ピカミング<ジャパニーズ>：植民地台湾におけるアイデンティティ形成のポリティクス』」 『日本台湾学会報』 21: 251-260
- 2019b 「台湾の先住民族とジェンダー平等・家族・国家関係」 『アジア法研究』 12: 131-145
- 2020 「台湾先住民における轉型正義／移行期正義と日本の植民地責任：太魯閣戦争／戦役と霧社事件をめぐる『和解』の動きから」 『比較日本文学文化研究』 13: 103-130

財団法人二二八事件記念基金会、陳儀深・薛化元編

『二二八事件の真相と移行期正義』

風媒社、2021年、538頁

抑圧の下で封印され続けた記憶と史実を再構築する試み

菅野 敦志

はじめに

本書『二二八事件の真相と移行期正義』は、財団法人二二八事件記念基金会が政府の「移行期正義」政策に基づいて進めた研究の成果であり、国史館館長の陳儀深および同基金会董事長を務める薛化元が主幹となり、8名の執筆者からなる研究グループによってまとめられた、「半公式」報告書の性質を併せ持つ論文集である。評者は、かつて二二八事件をめぐる市民運動と和解に関する調査を行った経験から¹、異なる観点からの意見を述べることに留意しつつ、簡単にはあるが以下に評してみたい。なお、日本語での表記としては「二・二八事件」も一般的に使用されるが、本稿では本書の訳文の用法にならひ、中国語の原文と同じ「二二八事件」で統一表記する。その他、文中の〔 〕内は評者による説明である。

本書の構成

本書は全7章からなり、参考文献や資料を除く本文だけで492頁となっている。序論で薛化元が述べるように、本研究はこれまで政府もしくは準政府機関が発表してきた報告書のなかでも最新の史料を活用して著された成果であり、以下、章立てを簡単に紹介する。序論および訳者名は省略する。

『二二八事件の真相と移行期正義』

- 第1章 二二八事件の原因についての論述——一九四七年の政府と民間における叙述の比較（陳儀深）
- 第2章 第二次世界大戦後の台湾の国際的地位および二二八事件前後における国際社会の視点——英米両国の公文書と世論を中心に（許文堂）
- 第3章 二二八事件における軍事的展開と鎮圧（蘇瑤崇）
- 第4章 二二八事件における県市長とその役割（歐素瑛）
- 第5章 二二八事件における情報機関とその役割（林正慧）

- 第6章 二二八事件のマスコミ業界への衝撃 (何義麟)
- 第7章 二二八事件をめぐる「正義と和解の追求」—名誉回復運動の歴史的考察 (一九八七年—一九九七年) (薛化元)
- 第8章 歴代総統の二二八事件に対する移行期正義としての貢献 (一九九八年—二〇一九年) (呉俊瑩)

以上が本書の構成であり、巻末には参考文献と索引が付されている。以下にコメントを述べてみたい。

コメント

本書ではそのような括り方はなされていないとはいえ、上述の章立てとその内容を見てみると、全体を三部構成で把握し、理解できるように思われた。そこで、各章を個別にとりあげるには紙幅が足りないため、以下では便宜的にこの三部構成を用いながら紹介してみたい。

まず、第一部 (第1章から第3章まで) は、事件の原因 (第1章)、国際社会からみた事件前後の台湾とその国際的地位 (第2章)、事件の軍事的展開および鎮圧過程 (第3章) といったマクロ/全体の枠組みと視点から二二八事件をめぐる状況および台湾内外における同事件の位置づけが検討される。そこでは、事件の原因には台湾人と外省人との「カルチャーギャップ」が決定的な要因として見受けられること、台湾の国際的地位は法的 (de jure) 帰属ではなく事実上 (de facto) の帰属により扱われたこと、「違法な権力乱用」による軍事力の行使が被害を甚大なものにしたこと、などが史料に基づきながら指摘される。なかでも、台湾省行政長官の陳儀が蒋介石に送った電報「寅冬 (三月二日) 亥電文」に代表される新史料が具体的な事実の解明に決定的な役割を果たした、といった共通点が示される。同電報は国史館が2017年に出版した『二二八事件档案彙編』に収められているが、事件を「奸党匪徒 (中国共産党およびその関係者)」や暴徒の攻撃を受けて「やむを得ず」受動的な鎮圧を余儀なくされたとする当事者側の説明には矛盾があり、実際には早期に出兵要請が出され、その要請が積極的かつ無制限な鎮圧を展開させる意図に基づいていた点を明らかにしており、その意義は少なくない。

続く第二部 (第4章から第6章まで) は、地方政府の首長 (第4章)、情報機関の関与と相互関係 (第5章)、台湾メディア界への影響 (第6章) といった、国家と民衆のあいだでさまざまな働きをなした主要なアクターや媒体をめぐる課題がミクロ/個別具体的に検討される。ここでは、17名の各県市長の二二八事件前後の動向には多様性が確認できるとはいえ、事件の責任を問われた行政首長は皆無であったこと、国防部保密局・中国国民党中央執行委員会調査統計局・憲兵司令部といった三系統の情報機関による三つ巴の攻防が地方秩序の混乱を過剰なまでに高めたこと、二二八事件を契機として展開された民営メディアへの抑圧と党営メディアの拡大の手法が、その後の白色テロ期を通じた報道管制の原型として見る点などが詳細に描き出されている。

なかでも、近年公開された情報機関の史料に基づき、台湾省警備総部調査室、第二処（1947年に情報処に改称）と国防部保密局との関係や憲兵特高組の暗躍に焦点を当てて検討した第5章では、ミクロなレベルでの反間計の展開とその顛末が詳述されており、国家権力による暴力が末端の単位でどのようにして行使され、いかなる副作用を伴うものであるのか、その深刻さを伝える内容となっている。「搜索、逮捕等を徹底して行う」「清郷」の後に続いた「鎮撫平定」としての“綏靖”の期間を通じて、「反逆者」リストが作成され、謀殺・暗殺にとどまらず、学生たちをも陥れて鎮圧的攻撃の餌食にした、といった幾多の生々しく残酷な叙述は、こうした一次史料の公開によって立証された貴重な事実である。

最後の第三部（第7章と第8章）では、事件前後の状況をめぐる検証から離れ、主に戒厳令解除以後の台湾社会に視点に移される。そこでは、戦後台湾で長らくタブーとされ続けた同事件をめぐる犠牲者（およびその家族）への名誉回復運動が、1987年の戒厳令解除前後からいかなる展開をみせ（第7章）、そのような下からの犠牲者の名誉回復を含む真相解明／補償請求運動に対して国家元首である歴代総統がどのように対処していったのか（第8章）が総合的に検討される。

この第三部は、二二八事件という個別の事件のみならず、現代台湾の社会と政治に関心を抱く広範な読者層の興味にかかわる内容と思われ、評者にとっても自身が行った調査を紹介しながら言及できる箇所でもあるため、他よりもやや詳細にコメントしてみたい。

第7章は1987年から1997年までの10年間に焦点を当てて、二二八事件をめぐる「名誉回復運動」の展開が紹介される。本書では、長年の二二八事件をめぐる禁忌を打ち破り、補償・名誉回復運動の機運を高めるなど、先鋒としての役割を果たした鄭南榕が反国民党の象徴的人物として紹介され、彼を中心に組織された「二二八和平日促進会」の役割と貢献が示される。鄭南榕は国民党に対して勇敢に抗い、焼身自殺したことで台湾独立の“烈士”となった。鄭南榕および二二八和平日促進会はともに犠牲者家族やその代表組織としての位置づけにはなかったが、一方で対照的であったのは、二二八事件の犠牲者を代表する存在となった林茂生の息子・林宗義であった。林宗義は、二二八事件の初の被害者団体である「二二八關懷聯合会」の代表となったが、彼は犠牲者家族であると同時に、台湾における新国家樹立を唱える「台湾人民自決運動」（1973年）の共同発議者でもあった。後者の点は、台湾独立論者であった鄭南榕と共通する。だが、反国民党としての究極的な抵抗の意思を、41歳での焼身自殺という衝撃でもって示した鄭南榕に対して、反国民党人士でありながら、敵であるはずの国民党に歩み寄り、70歳台の高齢にもかかわらず苦難に満ちた「官民協働」に身を投じたのが林宗義であった。

林宗義には、片腕となって共に活動した蘇南洲（キリスト教系メディアにおけるオピニオンリーダーかつ社会運動家）という人物がいた。蘇は二二八事件の犠牲者家族ではなかったものの、国民党の抑圧の下で迫害を受けた被害者として、林同様に反国民党であった。前述した、最初の被害者団体「二二八關懷聯合会」は、当初は「二二八家属団契」の名称で、フェローシップの形式をとって蘇の自宅地下で結成されたものであった（本章にはこのディテールについての記載はない）。何より、蘇南洲は本書でも言及される、1990年に「40年間で初めて政府閣僚と政府高官

が参加した民間の追悼」としての記念活動である「平安礼拝」（一九九〇平安礼拝——尊重人権、紀念二二八）を主宰した人物であった²。蘇南洲の重要性は、平安礼拝を成功させて後の「官民協働」へと向かう契機を創出した（行政院長の郝柏村が初めて犠牲者家族と握手して言葉を掛け合い、林宗義はこの平安礼拝を機に蘇とタッグを組むこととなった）のみならず、林宗義と二人で二二八事件の名誉回復・補償運動をめぐって「抗争から和解へ」の実現に向けた取り組みを続けた点にある。

蘇南洲は2020年に他界したが、評者は生前の蘇に対して実施した聞き取り調査に基づき、蘇と林宗義の思想と行動に関わる詳細、そしてキリスト教徒および台湾人犠牲者家族団体が初期においてどのような状況下でいかなる役割を果たしたのかについて2篇の論稿にまとめているので、初期段階における和解の動きと具体的行動に関心のある方はそちらを参照されたい³。他方、本章で薛化元は、「加害者なくして正義の追求ができなかった」にもかかわらず、「簡単に和解を口に」してきたことが台湾における「移行期正義」の根本的問題と指摘する⁴。その指摘に鑑みると、林宗義と蘇南洲の二人が選んだのは、真相の徹底的な解明が困難な国民党統治下にあっても和解への道筋をつけることであった、といえるかもしれない。とはいえ、世界精神衛生連盟名誉総裁としての肩書を持ち、精神医学の世界的権威であった林宗義が説いていたのが、抗争ではなく和解の道であったことも、人々の記憶の片隅に残るべき史実の一つであってほしいと評者は感じている。

なお、第8章では、国民党政権から民進党政権という2度の政権交代を経た台湾の政治状況下で、李登輝政権期、陳水扁政権期、馬英九政権期、蔡英文政権期にみられる施策の相違が検討されており、時系列での比較を通じて各時代の差異が浮き彫りにされている。評者はかつて二二八事件による被害者認定を外国人として初めて勝ち取った青山恵昭（父・青山恵先が事件の犠牲者）に聞き取りを行ったことがあるが、コロナ禍の期間を除き、毎年渡台して二二八事件追悼イベントへの参加を欠かさなかった青山も、馬英九政権期には追悼イベントの規模縮小が明白であったと述べており⁵、この点も本章で指摘されている内容と一致する。また、本章では林宗義の名前が随所に見受けられるが、そこからは国民党側の手法に反発し、抵抗を続けた林の姿を断片的にうかがい知ることができる。ただ、本書では紙幅の都合もあり、その詳細には言及されない。例えば、総統府に近接しているという理由で拒絶する政府側委員の反対を突っぱねて、「台北新公園」での二二八記念碑設置を要求して実現させた林宗義の功績といったようなミクロな動きまでは触れられてはいない。林宗義が徹底的に異議申し立てを行わなければ、中央政府による二二八記念碑は国民党側が推挙する台北市の新生公園に設置されたはずであった。中央政府による記念碑建立がなければ、同公園の「二二八和平紀念公園」への改名にも影響が及んだ可能性も考えられるのであるが、総じて、当時の「官民協働」がいかに困難な作業であったかについては、改めて同時代的な制限と制約のなかで理解可能となる部分が大きいようにも感じられた。

よって、まとめるならば、冒頭の二部では新史料を活用しながらさらなる歴史的考証が重ねられており、それに呼応する形で、最後の三部では、二二八事件が戒嚴令解除以後の台湾社会と政治変容に対して与えたインパクトと影響の分析を通じて、本書が総括されているといえるだろう。

繰り返しとなるが、本書は新たに公開された公文書や史料などを駆使しながら、これまで明らかとなってきた範囲をより拡大させ、いっそう詳細な全体像を描き出すことに成功している。そうした新たな事実を前に、評者は同事件の持つ重みと複雑さを痛感せざるを得なかった。権力側が振るう暴力とその不条理に言葉を失う状況は、眼前の国際社会においても依然として変わらず続いており、憎悪の連鎖を断ち切ることは不可能のようにも見える。だが、そうしたなか、第3章の蘇瑤崇による以下の記述は、二二八事件で生じた状況の描写に限らず、いかにして武器を持った人間が見知らぬ環境下であって“鬼”となりうるかを端的に示唆しているように思われ、深い感慨を覚えた。

二二八事件の期間、台湾は誇張された虚偽の噂で満ち溢れており、民衆に直接的に対峙することとなった国民党軍人の心理もまた、「風声鶴唳、草木皆兵」[ちょっとしたことにもおののき、疑心暗鬼になってびくびくすること（訳注）]というものであったと言える。この状況下で、彼らは「民衆の出現」を「大規模な暴徒の攻撃」という幻影へと、常に、そして無制限に膨張させてしまっていたのかもしれない。⁶

以上が評者からのコメントとなるが、あくまで異なる立場に立った場合にどのように見方もありうるのかという点にも、林宗義と蘇南洲の主張を借りつつ言及してみた。そのため、当然ながら異なる立場によって立てば、その重きを置く視点とフォーカスにはおのずと開きや間隙が生じてくることは今一度付言しておきたい。ただ、こうした差異は、台湾が多元的な歴史叙述を尊重し合うことのできる、学術的にも自由かつ開かれた空間であるからこそ成り立つものといえる。何より、薛化元が序のなかで、本書の基礎となった研究推進の意義を「自由、民主主義、人権の価値を深めることであり、この価値は、今日、台湾のソフトパワーを強化する重要な方向の一つ」⁷と指摘している箇所は重要であるだろう。台湾には内外で発せられる多様な主張や言論を包摂し、異なる立場にある他者を認め合う土壌が育まれてきた。単に多様な属性の人間が共存しているだけでなく、多様な思想を擁する人間が、おのこの主張をぶつけ合いながら共生する共同体として成立している点が台湾社会の強みと魅力であり、国際社会からも台湾という共同体の価値が認められる源泉になっていることを示しているように思われる。

おわりに

本書は分量も多く、各章が濃密な研究成果であるため、すべての論稿に対して詳細に言及することができなかったが、綿密な調査に基づいてまとめられた本書は、台湾の戦後史にとって最大の汚点でありながらも、今日において台湾アイデンティティの基盤形成において決定的な役割を果たしたといえる二二八事件の理解を深めるために必読の書であるといえよう。ただ、そうであるだけに、十分に練られていないままの訳文があったり、適切と思われる日本語の語彙に中国語の語彙が置き換えられていなかったりした箇所が一部に見受けられことは少々残念に思われた。

なお、最後に一点だけ言及して本稿を終わりにしたい。それは、事実やディテールは複雑かつ多面的であり、その実像を多様な主体から発せられた声、もしくは記録された文字を基にして再構築する作業が容易ではないという、至極当然であるものの、実に困難な作業そのものについてである。例えば、評者は蘇南洲による「彼 [李登輝による 1995 年] の謝罪文の草稿は私が手伝って仕上げた」⁸とのインタビュー証言に基づき、自身の論稿でもそのように記述した。だが、この記述に対しては、李登輝が総統の座を降りてから前国史館館長の張炎憲によるインタビューに答えた映像のなかで、当該原稿について「杜正勝が起草したものに、その後林宗義の建議を受けて政府による謝罪の内容を入れ込んだ」、と李が証言していたとの指摘が薛化元二二八事件紀念基金会董事長からあった⁹。

当時、林宗義と二人三脚で対応していた蘇南洲は、常に林の代理として文書や文章の作成に携わっていたため、関与の有無そのものが問題なのではない。だが、関与の程度や割合は、双方の当事者の口からは述べられてはいないため、聞き手にとっては不明となる。おそらく、蘇南洲自身も謝罪文全体の執筆にどれだけの人間がかかわり、手が加えられていたのかについて、全容を把握していたわけではなかったのかもしれない。林宗義を介して執筆を「手伝った」ことは確かであるものの、その行為者としては「唯一」ではなく「そのうちの一人」ということであったのかもしれないと、評者にはそう感じられた。一方で、この点については薛董事長自身も「先週 [2023 年 2 月下旬] に李総統のこのインタビュー映像を観ることがなければ私自身も知り得なかった」と評者に伝えていた¹⁰。これはあくまで一つの例に過ぎないものの、こうした気づきから改めて認識させられたのは、当然のことではあるが、想定外のさまざまな可能性をも含みうる記述を、研究者の側が絶えず意識しながら行っていく必要性である。史実を再構築し、歴史として書き残していく責任ある立場に置かれた研究者にとって、そうした“当たり前”に自覚的であり続けるべきことを、痛切に感じた次第である。

注

- 1 その調査とは、文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究 (研究領域提案型) 「和解学の創成」 (研究代表者: 浅野豊美) の計画研究の一つである「市民による歴史問題の和解をめぐる活動とその可能性についての研究」 (課題番号: 17H06338、研究代表者: 外村大) である。筆者は研究分担者として、台湾の二・二八事件をめぐる市民運動と和解について調査を進めた。
- 2 薛化元「二二八事件をめぐる「正義と和解の追求」一名誉回復運動の歴史的考察 (一九八七年—一九九七年)」財団法人二二八事件紀念基金会、陳儀深・薛化元編『二二八事件の真相と移行期正義』風媒社、2021 年、391-392 頁。
- 3 菅野敦志「『現実的理想主義者』と二・二八事件をめぐる和解の試み—林宗義・蘇南洲の役割に着目して—」外村大編『和解をめぐる市民運動の取り組み—その課題と意義』明石書店、2022 年、201-226 頁。Atsushi Sugano, “The Rehabilitation Movement over the 2.28 Incident under KMT Rule (1987-1997): Reexamining the transition from confrontation to reconciliation”, *Journal of Contemporary East Asia Studies*, Vol.11 Issue1, April 2022, pp.162-181. (<https://doi.org/10.1080/24761028.2022.2067611>) 前者は主に林宗義と蘇南洲の思想と行動に着目して紹介している一方、後者は困難な取り組みであった「官民協働」による和解のプロセスが誰によって、どのようにして推進されたのかに焦点を当てて検討している。なお、蘇南洲のインタビュー記録も資料として発表している。菅野敦志「『二二八平安運動』の提唱と台湾社会における和解—蘇南洲・彭海瑩インタビュー記録—」『共立国際研究』第 40 号、2023 年 3 月、143-160 頁。

松田ヒロ子 著

『沖縄の植民地的近代—台湾へ渡った人びとの帝国主義的キャリア—』

世界思想社、2021年、viii + 261頁

沖縄と台湾、そして、日本帝国の「支配」と「被支配」のはざまを往還した人びと

八尾 祥平

はじめに

かつての台湾では、日本統治時代の思い出を懐かしく語る台湾人が多くいた。ただし、こうした語りは日本帝国による植民地統治を単純に肯定するものではないことは台湾研究者に共有された大前提であろう。帝国主義や植民地主義による支配と被支配の関係はそう単純化できるものではなく、実際にはこうした単純化された構図では回収されない、さまざまな軋轢・衝突・葛藤が生じていた。このことを研究としていかに精緻に言語化していくのかということが、台湾研究というものの困難さであると同時に面白さでもあることはあらためて言うまでもない。

本書は、主に沖縄と台湾のはざままで移動を生きた沖縄人に焦点をあて、帝国主義や植民地主義から生じた「支配」と「被支配」をめぐる問題を、二項対立的な「支配」と「被支配」の構図を越えて、より実態に即して捉えなおし、かつ、より深い理解に到達することを目指している。

第1節 本書の構成と内容

本書の概要について紹介したい。まず、目次は下記の通りである。

- 序章 沖縄の近代を再考する
- 第一章 沖縄の人びとはなぜ海外へ向かったのか？
- 第二章 帝国の拡張と八重山の近代
- 第三章 「出稼ぎ者」の帝国主義的キャリア形成
- 第四章 植民地医学と帝国主義的キャリア形成
- 第五章 帝国のクレオール
- 第六章 米軍統治下沖縄への「帰還」
- おわりに

序章では、沖縄の近代や沖縄をめぐる人の移動を筆者はいかにとらえようとしているのかが示される。

まず、筆者は近代の沖縄を、国民国家としての日本という枠組みではなく、植民地帝国としての日本あるいは東アジアというよりグローバルな枠組みから捉えなおす必要があることを提起している。この枠組みのなかで、沖縄は〈内地〉と〈外地〉、あるいは、中央集権的な国民国家の権力と領土拡張を目指す植民地帝国のそれとがせめぎあう境界領域として再定位される。「植民地帝国の中の沖縄」という構図をとることで、筆者は、沖縄島を中心とする琉球王国時代の沖縄とは異なる、日本帝国の領土拡大の影響が最も大きかった地域である八重山諸島を中心にして沖縄の近代を描き出そうとする。

本書を通じた筆者の議論の重点は、沖縄と台湾のはざままで移動を生きた人びとにとっての近代とは何かを明らかにすることにある。「植民地帝国の中の沖縄」を前提とすることで、「日本人」と「沖縄人」というカテゴリーを固定的に捉えるのではなく、移動を生きる沖縄の人びとがこうしたカテゴリーのはざまでさまざまな葛藤をしつつ、権力関係を飼いならしつつ、近代的な主体として生きたのかを筆者は明らかにしようとしている。

本書を貫くキー概念はタイトルにもある「植民地的近代」である。「植民地的近代」論は、植民地収奪論のような植民地主義による支配と被支配を二項対立的に捉えるものではなく、近代の規律権力に着目し、近代的な主体形成の解放的な側面と抑圧的な側面の両面から明らかにすることを目指す。もちろん、「植民地的近代」論は、植民地主義を肯定する歴史修正主義では決してなく、植民地主義による問題をより実態に即した正確なものとして描き出すことを目的としている。

筆者による整理に沿えば、「植民地的近代」論が提起した点は以下の3点となる。第一に、西欧中心的な発展段階説への批判的介入、すなわち、すべての社会は西欧社会のようになることが目標とされるべきものでもなければ、異なる社会の間には優劣のようなものは存在しないということである。第二に、近代的な主体形成における権力の働きを解放的な側面と抑圧的な側面の両面から捉えることを重視すること。第三に、植民地近代における権力とは、本質的に国民国家の枠組みを越えて作用すると捉えることにある。

以上の点をふまえ、植民地帝国日本の中で沖縄と台湾間を移動した人びとが帝国主義に時に葛藤し、時に狡知によって利用しつつ、台湾での社会上昇を目指す近代的主体として生きた姿が後続する章で具体的に描かれていく。

第一章では、まず、19世紀の中頃から、南北アメリカやハワイの植民地開発において黒人奴隷にかわる労働力として中国人や日本人の移民労働者を受け入れては、都合が悪くなると規制するという列強による場当たりの労働政策によって移民労働者たちが振り回されてきたグローバルな労働史が簡潔に描かれる。そのうえで、これまで沖縄では他の移民先と同列に語られがちであった台湾の特殊性を筆者は析出する。台湾が他の渡航先と大きく異なる点は、沖縄人は台湾では支配する側に立つことができ、移動や職業選択の自由が認められ、かつ、総督府のような基幹的な組織に就業することができたことにある。たとえば、フィリピンなど、他の渡航先では同じ産業に集団で就業していたため、利害が一致していたことで「沖縄人」として団結して行動しやすく、「沖縄人」への偏見や差別に抗議する素地があったのに対して、台湾では各自が自由に渡

航し、就業していたため、「沖縄人」として凝集する契機を欠いていたことが指摘される。

第二章では、八重山から多くの人びとが台湾へと渡った要因が考察される。台湾と八重山の物理的な距離の近さが大きな要因としてみなされやすいものの、筆者はこうした距離の問題ではなく、日本国内の交通ネットワークの整備と拡充こそが大きな役割を果たしたと指摘する。八重山と台湾が近くなったのは、日本本土と台湾を結ぶ航路のなかで八重山が寄港地となっていたことなのである。戦後の台湾と沖縄関係は「近くて遠い」と感じることを評者はこれまでに幾度か経験しているため、筆者の指摘は少なくとも評者にとっては非常に納得できた。

こうした日本帝国の物流網が台湾と沖縄を包摂すると同時に資本主義経済体制に取り込まれたことで、八重山は植民地開発による近代化・都市化がすすむ台湾の「周縁」として再編され、このことが結果として八重山から台湾への移住を促した。これまでの沖縄移民研究では、琉球併合後の貧困が移住のプッシュ要因として指摘されがちであった。これに対して、本章における筆者の指摘は、八重山社会を地域社会単位でだけ捉えるのではなく、地域社会を越える植民地帝国日本の資本主義経済によって八重山が包摂されたことで、地域社会が変容し、移住を促した側面を強調している。

第三章では、台湾への「出稼ぎ」が帝国主義的なキャリア形成としてみた場合の意味合いが取り上げられる。台湾へ出稼ぎにでた沖縄人は支配者と被支配者という二項対立的な枠組みでは捉えきれないことを指摘したうえで、沖縄人が植民地台湾で近代的主体として社会階層を上昇することは、「日本人」すなわち支配者となることと同義でもあったことが析出される。また、こうした社会階層の上昇はジェンダー間で大きな差があり、女性にとって不利なものだった。だが、女性にとって標準的な（日本人）のライフスタイルを身につけることは象徴的な次元での「上昇」を意味するものでもあった。

第四章では、植民地医療を題材に台湾と沖縄をめぐる近代化のはらむ問題が取り上げられる。一般的に台湾は巨額の投資を背景にした植民地統治が徹底される一方で、沖縄にはそれほど投資がなされなかった。この差が台湾と沖縄での植民地医療の体制に大きな格差をもたらした。

キャリアという側面では、植民地医療体制の格差は、台湾では充実した医学教育機関が設置されたのに対して、沖縄では十分とは決していえない教育機関しか準備されなかった。ただし、台湾での医学教育機関が日本人と台湾人の共学となった点について、台湾人にとっては決して有利な制度ではなく、むしろ、この制度によって最もメリットがあったのは沖縄人であったことが指摘される。

台湾で医学を学んだ沖縄人の多くは、沖縄には戻らず、台湾や日本本土で医療者としてのキャリアをつみあげていた。だが、日本の敗戦後、彼らは沖縄に戻り、「戦後」の沖縄医療の復興の担い手となっていった。沖縄には満洲から引き揚げた医師によって設立された医療団体が現在も存続している。引き揚げ者によって沖縄の医療が復興したことは非常に重要なテーマであると評者は感じた。

第五章では、台湾育ちの二世や三世の「故郷喪失性」が主に論じられる。先述した通り、沖縄人にとって植民地台湾で社会的な地位の上昇を果たすことは（日本人）になることと同義であっ

た。このため、公務員や教員を中心に自らの本籍地や姓名を変更する沖縄人が少なくなかった。「故郷喪失性」は沖縄系の二世・三世により複雑で深刻なものとして経験された。たとえば、台湾で育ち、自らの出自にそれほど自覚がないものの「琉球人」差別を受け、沖縄人と日本人とのアイデンティティのはざまで葛藤するといった状況が生じていた。

その一方で、台湾で沖縄の歴史・民族を再評価する文化運動も生まれていた。この運動は差別に対する抵抗運動というよりも台湾における日本人知識階層を中心とした文化活動という側面が強かった。だが、こうした運動が川平朝申などの、戦前の台湾、戦後の沖縄で活躍する引き揚げ者たちにみずからのルーツやアイデンティティについて深く考える契機になったことは見逃せない。この文化運動が終戦直後の沖縄系移民の動向に大きな影響を与えたことを著者は指摘する。沖縄のアイデンティティを考える契機は日本本土と沖縄という構図からだけではなく、むしろ、こうした構図を越えるよりグローバルな移動からも生じているという筆者による指摘は、近代化と沖縄を理解するとはどのようなことなのかを端的に示す、非常に重要なものである。

第六章では、日本帝国の敗戦により、台湾から沖縄への引き揚げと、引き揚げ者の「戦後」が取り上げられる。沖縄人は引揚を契機として。社会的な階層や属性を越えて「琉僑」として一つにまとまった。前章で取り上げられた台湾で沖縄の民俗・文化の再評価運動の参加者が沖縄への引き揚げにおける主導的な役割を果たしていたことが指摘される。

こうした台湾からの引き揚げ者は、医療分野だけでなくさまざまな分野で、沖縄社会の復興を担う人材として生きることになった。ただし、彼らにとって沖縄社会は生まれ育った台湾とは習慣やライフスタイルの違いを感じるだけではなく、「沖縄戦の悲惨さを経験していない」という点で負い目を感じざるを得ず、必ずしも居心地が良いわけではなかった。日本帝国の敗北後の沖縄社会は、住民の大半が農業に従事しつつ、その一方で第三次産業の就業者は人口比に対して大きな所得を得ていた。こうした職業を担った者のなかに少なからず台湾引揚者がいたと考えられる。評者は、台湾引揚者が沖縄においても「支配者」として生きていたと理解した。沖縄は、1972年5月まではアメリカの施政権下におかれると同時に、日本帝国時代の植民地での支配者の経験も入り混じる場所であった。

おわりにでは、本書全体の議論を振り返ると同時に、植民地台湾で同じ空間と時間を共有しつつも、日本人、沖縄人、そして、台湾人がそれぞれに異なる意味づけをし、その記憶も異なる形で継承されるという考えさせられるエピソードで締めくくられる。

第2節 本書の意義と可能性

本書はすでに多くの書評がなされている（上水流 2021、伊藤 2022 など）。このため、本稿ではできるだけこれまでの書評で論じられた議論とは異なる視点で本書の意義について評者なりに考えた点を述べていきたい。なお、植民地的近代論の可能性と限界については筆者自身がすでに論じたものがあり（Matsuda 2011）、この書評ではこの点については取り上げない。

まず、沖縄研究における本書の位置づけを、あえて一言でまとめるなら、沖縄近現代史の捉え

なおしに取り組みつつも夭逝した歴史家・屋嘉比収の問題意識を引き継ぎ、深化させた、ということになるだろう。たとえば、沖縄をよりグローバルな日本帝国のなかで捉えなおすのと同時に、沖縄島を中心とするのではなく、八重山に着目して捉えなおすことは、生前の屋嘉比が取り組んでいたさまざまな「捉えなおし」の作業を筆者が独自の切り口から展開したものとみることができ。ややもすれば、沖縄を戦後日本の「中心と周縁」という構図や、沖縄島を中心にした視点で議論されることがまだまだ根強い中で、久しぶりに刺激的な議論を読むことができた。

次に、台湾研究における本書の位置づけを、とりわけ、近年の台湾における研究の潮流を念頭において取り上げたい。本書を読んでまず思い浮かべたのは、この10年くらいの間に台湾で研究の蓄積が進んでいる台湾史の「捉えなおし」の作業に関わる研究であった。たとえば、林玉茹の東台湾への着目は、本書における沖縄の「周縁」である八重山から沖縄の近代を捉えなおすという問題意識とも近いものがある(林 2007)。また、陳延媛による台湾と朝鮮とのつながりや比較の視座(陳編 2007)は、本書の台湾と沖縄という日本帝国の「周縁」間から日本帝国をめぐる新たな議論を展開した点で同時代性があるといえる。なお、「周縁」をめぐる台湾史研究では旧日本帝国の内部だけではなく、台湾と東南アジアとの関係に着目した研究も見られるようになってきている。評者は「周縁」間研究について、台湾では日本以上の質と量の研究の蓄積がみられるようになってきていると考えている。

こうした沖縄研究や台湾研究の中での本書の重要な意義のひとつには、これまで日本本土を中心とすることを前提に、沖縄や台湾といった「辺境」を鏡にして日本社会の姿を捉えるような議論を批判的に乗り越え、八重山や台湾のふもとにとっての近代化という経験を描きなおしたことが挙げられる。当たり前の話だが、台湾人や沖縄人は、日本人が自画像を描くための鏡ではない。字面ではわかっていたとしても、台湾人や沖縄人の目に映る社会を描きなおす研究の蓄積はまだまだ十分とはいえない。日本社会に向けて本書が投げかけた問いを読者のひとりひとりが自分自身で考えることが求められている。

次に、英語圏におけるフーコーの議論の枠組みを用いて植民地の社会的現実を分析する議論の潮流から本書について論じてみたい。本書のキー概念となる植民地近代や帝国主義的キャリアはフーコーの規律権力論がベースとなっている(フーコー 2020 など)。フーコー自身は国民国家としてのフランスを事例に議論を展開しているものの、英語圏ではサイドらの植民地出身の知識人に大きな影響をおよぼしている(サイド 1986)。サイドだけでなく、たとえば、エジプトの植民地化を規律権力の浸透の過程として描きなおすなど(ミッチェル 2014)、近代そのものを植民地から捉え直す研究が英語圏では進展している。本書もフーコーの権力論の枠組みを用いて帝国主義・植民地支配の問題を分析する英語圏での研究と接点をもっている。

ただし、本書が英語圏でのフーコーの議論をベースにした点を安易に新しいとか、意義があると評者は考えているわけではない。本書はもともと筆者の英語による2冊目の著作である *Liminality of the Japanese Empire* (2020) として出版されたものがもとになっている。英書版では、英語圏での読者の理解を深めるためにフーコーの議論の枠組みが利用されている。現在、英語圏の植民地研究者の間ではフーコーの議論の枠組みがいわばプラットフォーム化している。英書版

でフーコーの枠組みを用いたことで、英語圏の台湾や沖縄を専門としない他の植民地研究者との間でも植民地を生きた人びとにとっての近代とは何かを議論できる道を切り開いた点こそが大きな意義である。同様に、本書は、日本語での読者、とりわけ、台湾研究者と沖縄研究者の双方が理解を深めやすくするために、台湾と沖縄について理解するために必要な事項についての説明や、もう少し詳しく知りたい時のための参考文献が丁寧に取り上げられており、単純に英語を日本語に訳したというものではない。筆者はそれぞれの言語圏の読者が沖縄と台湾を理解するために必要な枠組みや事項を丁寧に「編み上げて」おり、この点についてはただただ感嘆させられた。

少し話がそれるのだが、フーコーの権力論は規律権力だけでなく、統治性と呼ばれる議論の潮流がある（フーコー 2006 など）。統治性とは、人間をひとりひとりとしてではなく、「人口」として集团的に管理し、治安を維持するタイプの権力である。警察や医療などをつうじて社会の「安全」の維持が図られるのはこの統治性の問題として位置づけられる。本書でも参照されるアン・ローラ・ストーラーは、フーコーの議論を国民国家の枠組みを越えて植民地とのつながりから捉えなおすことを批判的に提起している。ストーラーは、ヨーロッパの近代社会におけるセクシャリティの概念がヨーロッパの内部から構築されたのではなく、植民地での人種主義との関わりによって形成されてきたものであると指摘している。

こうしたフーコーの統治性の枠組みから台湾の植民地医療を論じた美馬達也による研究がある（美馬 2015）。美馬自身が医学者でもあり、医学者としての視点で植民地医療史を分析し、現代の「リベラリズム的統治」による医療の歴史的淵源は植民地医療にあるという指摘は興味深い。また、近年の台湾でもフーコーの統治性の議論を参照しつつ、日本帝国による近代化を問い直す林文凱による一連の研究が進展している（林 2019; 2021 など）。

松田や林らによる研究は、日本と台湾の帝国史・植民地史の分厚い蓄積をもとに、英語圏での旧植民地出身の研究者との間にも新たな議論を堅実に展開するものとして評者は注目している。以上から、本書は日本と台湾という地域のつながりを越えて、よりグローバルに台湾と沖縄の近代は議論しうることを示した、大きな画期となる研究成果として高く評価したい。

なお、本書を英書版と併せて読むことを通じてあらためて気づかされ、考えさせられたのは、英語圏で台湾研究に限らず植民地について考える人びとによっても参照しうる、日本語で書かれた高い水準の台湾研究の成果がおそらくは英語圏では知られずにいることである。たとえば、若林正文『台湾抗日運動史研究（増補版）』（2001）や野口真広『植民地台湾の自治』（2017）などは、英語圏の台湾とは異なる植民地史の研究者が読みこんでも重要な示唆が多く得られるだけでなく、台湾研究に新たな議論の展開がもたらされるのではないかと思われた。本書は台湾がより広く世界とつながりうることを示してくれている。

本書を読んでいくつか気になった点について述べたい。本書で帝国主義的キャリアとして取り上げられた職業として、医療や警察が登場する。これはフーコーの権力論と植民地統治との研究の潮流の中で理解することができる。本書では前者については台湾と沖縄の近代化において医療の果たした役割が分厚く描きこまれていたのだが、後者についてはそれほどではなかった点が評者としてはやや物足りなく感じた。台湾の統治初期では沖縄出身の警官が少なからずいたことや

警察が公衆衛生管理も担っていたことはよく知られている。その一方で、激しい沖縄戦により当時の一般住民の約 25 パーセントが死亡し、壊滅した沖縄社会で最初に復興した組織が警察であること、そして、戦後はおそらく琉球警察の内部には、台湾でも警官をしていた引揚者もいたであろうことを考えると、警察官というキャリアから台湾と沖縄の近代化は医療と並ぶ重要なトピックとして、もう少し筆者による鋭い分析を読んでみたかった。

また、植民地台湾において、結婚や恋愛、出産などによって、沖縄人というカテゴリーそのものが揺らぐような事例が取り上げられてはいなかった点も気にはなった。たとえば、台湾での沖縄人女性と朝鮮人男性の夫婦の事例などは日本帝国内のエスニック・バウンダリーの揺らぎを生じさせる事例(富永 2019)についてはどうだろうか。こうしたエスニック・バウンダリーの揺らぎは、帝国主義的キャリアをも揺るがすことにつながりうると考える。こうした複雑な様相の事例をしっかりと分析する高い力量がある筆者だけに、その点についての分析も読んでみたかった。

これらの点は、もちろん、限られた紙幅のなか、明確に議論を展開する上で、本書全体の統一性をばやけさせてしまう蛇足の指摘に過ぎず、本書の持つ、高い意義を低くするものではない。

おわりに

繰り返しになるが、本書はこの 10 年ほどで研究が急速に深化した感のある台湾をめぐる「周縁」間関係についての研究の白眉である。台湾研究、沖縄研究の別なく、とりわけ、大学院生などの若手研究者が参照すべき必読書が新たに加わったと感じる。「周縁」間関係に取り組もうとする若手研究者はひとつでも多くのことを本書から読み取り、さらに、本書での議論をいかにして乗り越えることができるのかという課題に挑戦してほしい。このように書くと、本書に対して敷衍を高く感じる読者もいるかもしれない。本書は学術的に高度な内容が含まれていることは確かだが、丁寧に書かれているため読みやすさも兼ね備えている。とりわけ、本書が取り上げた魅力的な「語り」の世界を読者には楽しんでもらいたい。この書評でその一端を紹介するのはもったいないと思い、あえて、語りを引用することはしなかった。それくらい、本書は読んでとても面白いことは請け合いたい。

最後に、評者の個人的な雑感を述べることをお許しいただきたい。評者は、本書のもととなった英書が出版されたとき、筆者の著作を日本語で読むことはおそくないだろうと思い、そのことが少し残念に思われ、ため息をついていた。いま、こうして日本語で書かれた本書の書評を書いているというめぐりあわせに、物事をあまり悲観的にとらえすぎるものではないと思なおしている。

ひとりでも多くの人に、装丁も含めていねいに織り込まれた本書をひもとく愉しみをじっくりと味わってもらいたい。

謝惠貞

『横光利一と台湾—東アジアにおける新感覚派の誕生—』

ひつじ書房、2021年、413頁

植民地統治下の重層的文化交渉の実像に迫る

豊田 周子

本書は、2021年にひつじ書房より出版された、^{モダニズム}新感覚派の旗手・横光利一（1898～1947）の東アジアにおける影響を、比較文学の立場から論じた研究書である。

本書の目的は、これまで日本統治期台湾人作家の作品研究において周縁に置かれてきた「台湾モダニズム文学」の研究に、新生面を開こうとするところにある。著者の経歴は、本評に先行する簡中昊氏の書評¹に詳しいため、そちらに譲ることとしたい。本書の構成は以下の通りである。

- 序章 日本統治期台湾における新感覚派
 - 第一章 一九三二年—一九三六年横光利一受容の概観——楊逵と「純粹小説論」を中心に
 - 第二章 明治大学での師事——横光利一「頭ならびに腹」と巫永福「首と体」
 - 第三章 構図としての「意識」の発見——横光利一「時間」と台湾最初の「意識の流れ」小説、巫永福「眠い春杏」
 - 第四章 植民地的メトニミーの反転——横光利一「笑われた子」と翁鬧「^{ロオハンガア}羅漢脚」
 - 第五章 翻訳による権威の流用、そして中国新感覚派の誕生——横光利一「皮膚」と劉呐鷗「遊戯」
 - 第六章 越境する言語とカメラアイ——横光利一「蠅」と鍾理和「蒼蠅」
 - 第七章 孤独な受容——戦時下における龍瑛宗「邂逅」「ナポレオンと横光利一」による横光利一の受容
 - 第八章 李箱「童骸」における横光利一の受容——横光利一「頭ならびに腹」「皮膚」との比較を中心に
 - 第九章 東アジアにおける横光利一「皮膚」受容の射程——劉呐鷗「遊戯」、翁鬧「残雪」、李箱「童骸」をめぐって
 - 終章 「台湾新感覚派」の系譜——文体と題材の受容と変容
- 付録論文一 『定本横光利一全集』未収録随筆「台湾の記憶」その他——『台湾日日新報』における横光利一
- 付録論文二 「雅歌」「盛歌」「天使」における「純粹小説論」の実践他——横光利一にとっての外地「台湾」の視点から

卷末資料

このように、序章と終章に挟まれた九篇の論考を中心に、『横光利一全集』未収録の「台湾の記憶」や、新発見資料である横光「純粹小説論」に対する台湾文学界の反響を報じた新聞記事を付し、それらの解説となる二篇の論考が加えられた、総数 413 頁にもおよぶ文字通りの大著である。

本書は、台湾作家に対する横光文学の影響について、その指摘に留まっていた先行研究²を推し進め、楊逵（1905～1985）、巫永福（1913～2008）・翁鬧（1910～1940）・劉訥鷗（1905～1940）・鍾理和（1915～1960）・龍瑛宗（1911～1999）らの作品における受容の様相を個別具体的に検討したものである。作家の蔵書・日記・当時の紙誌にみられる言説を参照し、東京の中央文壇と台湾本島の文壇の狭間にあった台湾作家の立場を斟酌しながら、テキスト生成の背景を立体的に描きだそうとしている。抽象的かつ観念的なモダニズム文学のテキストを、H・バーバの「植民地の擬態」やJ・ラカンの「鏡像段階」、あるいはG・ジュネットの「物語論」など、西洋文学理論を駆使しながら解説しようとする渾身の作といえよう。

次に、各章の梗概について述べたい。

第一章では、1932年から36年にかけて、日本「内地」で展開される「文芸復興」に、当時の台湾文壇が如何に関心を寄せていたかが明らかにされ、多くの作家を魅了した横光の「純粹小説論」（1935）をとりあげる。台湾のプロレタリア作家の筆頭格とも言える楊逵は、自身の文芸誌『台湾新文学』の創刊時に、『台湾文芸』のメンバーたちと「文芸大衆化論争」を繰り広げる。その際、横光が上述の文学論において、純文学における通俗性の必要を主張したことを、高く評価したと論証している。

第二章では、巫永福の留学時代の師であった横光利一との師弟関係や、彼の周囲にいた1930年代の『台湾文芸』の構成メンバーの所属団体を比較考察しながら、巫永福の立ち位置と、彼の日本語文体創造の道のりについて論じられている。ここでは、巫永福「首と体」（『台湾文芸』、1933）が横光「頭ならびに腹」（1924）の模写であることが明らかにされ、植民地出身者が帝国の中心である東京をさまよう様子が描かれていると指摘する。

第三章、巫永福「眠い春杏」（1936）では、この作品の他にない「異質性」が論じられる。巫永福が横光「時間」（1931）を受容するなかで、伝統的家父長制下のサルタンであった台湾版童養媳「^{ツァボカン}査某嫻」の内面を、当時としては稀有な“意識の流れ”により描き出そうとしたことを明らかにしている。

第四章では、翁鬧の「羅漢脚」（『台湾新文学』、1935）における横光「笑われた子」（1922）の模作の形跡が検討されるとともに、台湾語による換喩を通じて、翁鬧が如何に主体的に作品を創造しようとしたかが論じられている。

第五章では、映画製作者として上海で活躍した劉訥鷗の横光受容が論じられる。劉訥鷗が新感覚派の文体と描写対象に着目した理由、中文翻訳小説集『色情文化』（第一線書店、1928）の収録作品の選定方法や、横光「皮膚」（1927）を模作した「遊戯」（1928）に見える戦略的表現技法について分析されている。

第六章は、渡華経験のある鍾理和の横光受容である。鍾理和が、日本語から中国語に「自己翻訳」を通じて創作を行い、横光の『欧州紀行』（1937）から魯迅を受容したことや、その作品「蒼蠅」（『聯合報副刊』、1959）を横光の「蠅」（1923）のパロディとして創作したことの意味が探求されている。

第七章では、龍瑛宗の横光受容が検討されている。横光の「頭ならびに腹」の模作として「邂逅」（『文芸台湾』、1941）を書きながら、横光の「ナポレオンと田虫」（1926）を批判する「ナポレオンと横光利一」（『孤独な蠹魚』、1943）の一文を書いたことなど、その受容のアンビバレンスなあり方が指摘されている。

第八章は一転して、韓国の詩人李箱（1910～1937）の横光受容がとりあげられる。まず李箱の文芸論「現代美術の揺籃」（1935）が横光の「唯物論的文学論について」（1928）に倣ったものとしたうえで、横光「頭ならびに腹」・「皮膚」の影響下に、小説「童骸」（『朝光』、1937）が書かれたことが論じられている。

第九章では、これまで取り上げられてきた作家たちが再び登場する。横光自身が「清新なりリズム」と称した「モガと青年の恋愛」（「皮膚」）というモチーフを、劉訥鷗・李箱・翁鬧ら東アジアの作家たちがいかに取り込んだか、またその表現の別について考察されている。

終章では、以上を踏まえて、台湾作家の横光受容が次のようにまとめられている。

(1) 台湾作家は「借り物」であった宗主国の言語である日本語を逆にとり、自分たちと日本文学との関連性や独自性を模索しながら、クレオール性に富んだ台湾独自の新感覚派を形成した。(2) そこでは、同時代の台湾文学界が求める郷土や下層階級の描写、また文学観にそった模作が探求された。(3) その創作過程で生じた「言語変異」は豊かな多様性を秘めていた。しかし当時は、作品そのものの新味や意義が重視されるというよりは、書き手が属する文芸集団と結びつけた作品評がなされるなど、時代の制約を免れなかった。

こう結論したうえで、新感覚派の受容をより長期的なスパンで観察し、台湾の新感覚派・モダニズム文学と、日本プロレタリア文学の影響下に拓かれようとした「植民地の擬態」を探求したいとの展望が述べられている。

本書は、台湾作家の作品が主に考察されているが、第八、九章で、東アジアのモダニストとして近年注目される韓国の文学者・李箱の横光受容も検討されている。こうした対比の一齣を加えることで、台湾作家の個性が浮き彫りになるよう企図されているのだろう。また、「付録論文二」は、新発見資料の解説であると同時に、第一章の楊逵の横光受容の背景を補完するものともなっている。

さて、全章にコメントすることは評者の力量を超えるため、以下では、特に関心をもった二点に絞ってみてゆくことをお許し願いたい。

(1) まず、近代と前近代、植民と被植民、西洋と東洋、都市と農村、男と女など、多様な価値観や文化が交錯かつ融合する地点に生まれた、植民地台湾のモダニズム文学を論じる際には、新感覚派（ここでは横光利一）の受容を読みとると同時に、それを相対化し得るような、別の観点からの比較分析を併せ考えることも必要ではないだろうか。それは例えば、邦訳を通じて台湾人

作家が親しんだ世界文学の影響、魯迅に代表される中国新文学の影響、中国古典文学の影響、作家の基層言語の影響などである。

例えば第三章の巫永福の「眠い春杏」について、この作品の文体には確かに著者が述べるように、横光「時間」の影響が感じられる。また時空の交差や眠りの描写は「意識の流れ」であることも指摘のとおりだろう。一方、本書の観点とは異なる立場から、許俊雅（2011）は、本作がアントン・チエーフ（1860～1904）「ねむい」（邦訳、1919。原題：Спать хочется、1888）の模作であることを、テーマ・小説構造・モチーフなどの類似性から検証している。許は、20世紀台湾文学とは、模作による自己改造・変異体作成の過程であったが、そこには世界文学に連なる普遍性と台湾独自の創意があったと結論している。これは著者とも同じ方向性をもつ見解であり、併せて論じることにより更に議論が深まったかもしれない³。

第四章の翁鬧^{ロオハンカ}「羅漢脚」では、日本語テキストに埋め込まれた台湾語表現や、検閲を意識した微妙な語りの指摘があるが、評者などはここから、台湾の郷土文学を台湾話文により構築しようとした、頼和（1894～1943）の中国語作品に見られる表現の揺れを連想した。頼和作品における世界文学の影響はつとに指摘されているが、その小説テキストは、植民地の写実主義的リアリズム文学と一括できるものではなく、使用言語や小説構造、内包された精神性といった諸点において、相当に重層性を孕んでいる。

第六章の鍾理和「蒼蠅」について、著者による緻密な文体や小説構造の比較分析から、本作が横光の受容下にかかれた作品であることは疑うべくもない。著者は、鍾理和が、横光「蠅」の全知の視点（焦点化ゼロ）や男女の密会をあざ笑うかに飛び回る「蠅」のカメラアイ（外的焦点化？）を取り入れながら、蠅の視点と男性登場人物の視点（内的固定焦点化）が交差する箇所を設けたことを指摘する。それにより、横光作品にはなかった、道ならぬ恋をする当事者の、自らの「欺瞞」を自嘲する余地（人間味）が生み出されたと分析するのである。さて評者は、この最終部分の蠅のカメラアイが男性主人公（「≒作者・鍾理和」と論者は言う）の視点とも読み替えられるとの指摘から、魯迅「阿Q正伝」（1921～22）の最後に描かれた処刑シーンを想起した。「阿Q正伝」の最終部分の叙事は、三人称全知の視点が阿Qの内面へと焦点化するなかで、処刑場に向かう阿Qの恐怖が、あたかも作者・魯迅自身の恐怖であるかのように読める作品となっている⁴。このことを踏まえれば、横光にはない、叙事視点の切り替わりは、あるいは鍾理和が「阿Q正伝」に倣ったものとの可能性も考えられるかもしれない。また、本作で獲得した「内的焦点化」の視点が、同テーマを扱った彼の一連の作品に、その後どのように生かされたのかも知りたく思った⁵。

第七章でも作品が取り上げられる客家出身の文学者・龍瑛宗は、同じ言語的背景を持つ日本語作家の鋭さで、呉濁流の長編小説『胡志明』の日本語文体に、中国古典文学のテンポやニュアンスを嗅ぎ取っている⁶。本書に登場する、巫永福・鍾理和は客家であり、翁鬧も客家の可能性が示唆されている⁷。また先述の頼和も客家にルーツをもつ。台湾文壇の主流とは一風異なる表現方法を求めた彼らが、共通のエスニックの出身であることは、たんなる偶然にすぎないだろうか。

(2) 次に、評者の研究の関心から、被植民者である男性作家が描く女性表象に注目してみたい。該当するのは巫永福「眠い春杏」（三章）、劉訥鷗「遊戯」（五・九章）、李箱「童骸」（八・九章）、

翁闢「残雪」(九章)(『台湾文芸』、1935)である(六章の鍾理和「蠅」は必ずしも女性の表象にフォーカスした分析ではないため割愛する)。

なかでも、評者は第三章を関心を持って読んだ。巫永福の「眠い春杏」は、郭秋生(1904～1980)が「査某嫻」をテーマにした作品を例に、昨今の台湾新文学は類型化されたものが量産され意識改革が必要である⁸と、述べたことに応じて書かれたものという。巫永福はそこで、横光が「頭ならびに腹」で、機械が計測する物理的時間と人間の内的時間を対置させ、後者に勝利を与えることで近代化に翻弄される人間の主体性を回復しようとした試みを模作し、虐げられる「査某嫻」の主体性を、従来の傍観者的写実スタイルではなく、意識の流れを用い主人公の内面意識を描写することにより表現した。そして現実ではあらがいのない婢女の悲惨な運命に、観念の上で救済の道を開こうとしたとの分析は極めて興味深い。

これは、後に続く、劉訥鷗や李箱また翁闢の作品分析に見られるような、モダンガールに翻弄される知識人青年のモチーフの模作とは様相を異にしている。横光作品の場合は、青年が性に奔放な観念をもつモボに最終的に敗北する結末となる。対して、劉訥鷗や李箱また翁闢の作品では、横光のモチーフを援用しつつも、民族的には去勢されても同族内では男の「沽券」を守るために、モボ(女性)への敗北を回避した結末になっていると著者は分析する。ここから、同じモダニズム文学の描写と言えど、本質的に異なる意図をもって書かれていることが窺える。一方、本書の射程からは外れるが、台湾新感覚派とは様相を異にすると著者が述べる(288頁)、同時代のモダニズム詩に描かれた台湾女性の表象と比べた場合、そこに差異⁹はあるだろうか。これについても著者の見解を聴きたく思った。

なお、近代台湾文学のハイブリッド性については、黄美娥が漢文文言小説を題材にして、作品の翻案やリライトを検証する比較文学的研究を行なっている¹⁰。これも台湾モダニズムのあり方を考える上では参考にするべき研究だろう。

以上、著者の議論を十分に理解できているか甚だ心もとないが、本書の議論を通じて、台湾文学におけるモダニズムとは何かという問いを突き付けられたとともに、新文学においても同テーマに実直に取り組む必要をあらためて認識させられた。複雑な文化交渉のもとに生まれたテクストの類似性や差異性の意味を、時代の文脈に照らして丹念に読み解こうとする本書の姿勢に深い敬意を覚えたことを、最後に申し添えておきたい。

注

- 1 簡中昊「謝惠貞『横光利一と台湾 東アジアにおける新感覚派(モダニズム)の誕生』」『跨境/日本語文学研究』第15号、2023年3月、245-247頁。その他の書評として現在までに、劉妍「現代主義文学在东亚的越境 謝惠貞『横光利一と台湾 東アジアにおける新感覚派(モダニズム)の誕生』」(『中国文芸研究会会報』第493号、2022年11月、5-7頁)、田口律男「換骨奪胎をはかる創造の刻印——モダニズム文学が、日本統治期の台湾(さらには東アジア)の日本語文学にもたらした作用/反作用を多角的に検証」(『図書新聞』3544号、2022年5月21日)が確認できる。
- 2 李征『日本と中国の新感覚派文学運動に関する比較文学的研究：1920-1940』(筑波大学博士論文、1998年)、彭小妍『海上説情慾：從張資平到劉訥鷗』(中国文哲研究所籌備處、2001年)、李歐梵著・毛尖訳『上海摩登』(北京大学出版社、2005年)など。詳しくは謝惠貞本255頁を参照されたい。

明田川聡士 著

『戦後台湾の文学と歴史・社会：客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学』

関西学院大学出版会、2022年、336頁

変容しつづける戦後台湾文学の歩みと「いま」

西端 彩

はじめに

本書は「あとがき」によれば、著者の博士請求論文「李喬文学と『台湾意識』の形成——フォークナー、安部公房の受容と『歴史素材小説』創作をめぐる」をもとにした4編の論考と、博士号取得後に執筆した4編の論考を加筆・修正しまとめたものである。収録された8篇の論考はそれぞれ独立したものであることから、「はしがき」には導入として、全編に共有する著者の問題意識と全体の見取り図が示されている。

以下では、最初にその見取り図を参考にしながら本書の概要を紹介し、次に評者の関心に基づいてその特徴と意義を述べ、最後に若干のコメントで締めくくりたい。

第1節 本書の構成と概要

本書の構成は以下のとおりである。

第一部 重層化する歴史とアイデンティティ

第一章 一九七〇年代官製文学のなかでの抵抗と台湾意識の再編成

——李喬『結義西来庵』における抗日表象の重層性

第二章 二二八事件をめぐる歴史描写と戒嚴令解除後一九九〇年代台湾社会との関係

——李喬『埋冤一九四七埋冤』における孤児意識からの脱却

第二部 文学の越境と社会での受容

第三章 「虚構」の想像と創造

——李喬『寒夜三部作』におけるフォークナー作品の影響

第四章 台湾文学における一九六〇年代実存主義運動から一九八〇年代民主化運動への展開

——李喬「小説」と台湾文学界における安部公房の受容

第三部 戦争の記憶と反戦への想い

第五章 物語化されていく太平洋戦争

——李喬『山女』所収の短編小説から『孤灯』への展開

第六章 二十一世紀の台湾文学における戦争記憶の継承
——呉明益『睡眠の航線』から『單車失窃記』へ

第四部 郷土想像の変容と拡張

第七章 新郷土小説と「七年級」作家

——楊富閔『暝哪会這呢長』と『花甲男孩』、テレビドラマ『花甲男孩転大人』の関係

第八章 台湾人と東南アジア出身の外国籍労働者／配偶者との距離

——『四方報』および「移民工文学賞」、映画『台北星期天』について

それでは第一章から第八章にわけて概要を述べていく。

第一章は、李喬の長編伝記小説『結義西来庵』（1977）をめぐる論考である。この作品は蔣経国の号令で編纂された『近代中国叢書・先烈先賢伝記叢刊』の1冊に納められた「典型的な官製文学」（3頁）であり、本名（李能棋）で発表された。『近代中国叢書』自体、主な台湾文学史には論述が一切なく、そのため李喬による第1作目の歴史小説とみなされながらも十分に考察されてこなかったという。

『結義西来庵』は事件の全貌を史実に即して克明に描くが、首謀者の余清芳ではなく、彼とともに主導した羅俊の描写に3分の1の紙幅が割かれている。羅俊は中国に渡り辛亥革命を目の当たりにした経験から台湾の解放を願った人物として描かれ、「台湾と中国大陸の紐帯」（15頁）を強調する物語展開となった。それは、蕭阿勤によると「一九七〇年代における台湾人のあいだでの日本統治期に対する集団的記憶の基調とは、国民党が主導する中国民族主義を起点として台湾と中国大陸の関係を確固として繋ぎ合わせる歴史叙事モデルであった」（17頁）ことから、李喬も「民族」と「抗日」をハイライトに西来庵事件の物語を描き出そうとしたのだと著者は分析している。

さらに、著者は、1970年代に「台湾基督長老教会」による台湾意識を掲げた一連の政治的声明が李喬に影響を与えた可能性も指摘する。団結したキリスト教信者による国民党への対抗に、王爺信仰をよりどころとする民衆の抗日蜂起が重なり合う、「台湾人が絶対的な権力に対して抵抗していく主体的な姿」（29頁）として、義民の「抗日表象」を軸とした物語に描き出されたのは、李喬自身が西来庵事件を追体験するなかで獲得していく台湾意識を基盤とした自身のアイデンティティの再編成に基づく内容であったのだと結論づけた。

第二章では二二八事件を題材にした『埋冤一九四七埋冤』（1995年）を取り上げ、その歴史描写と戒嚴令解除前後の台湾社会のつながりを考察する。

二二八事件を題材とした小説は「二二八小説」と呼ばれ、民主化が進展する1980年代から複数の作家が創作と発表を行ってきた。とくに、1979年の美麗島事件は二二八事件にまつわる政治的禁忌が打破されていく転機となった。李喬もこの時期に連続した政治事件に直面し、自身の創作を通して政治的禁忌に挑戦していくようになる。なかでも、二二八事件に関連する問題に対して積極的であったのは日本統治期に抗日活動家だった父親が疑いをかけられ連行された後、人格が急変する姿を目の当たりにした自身の原体験があったからだという。

『埋冤一九四七埋冤』は、上下2巻の大冊で、上巻は二二八事件を実録のように描くもので、下巻には事件から白色テロの時代に生きる台湾人の姿が描かれる。著者が着目するのは、下巻に登場する葉子という女性と、事件で軍兵に暴行されて産まれた私生児の浦実（日本語の「うらみ」に由来する）である。李喬は浦実を自身の「代弁者」とし、物語中では苦悩の表徴として描き、「私生児、雑種」と嘲罵される浦実を、日本の植民地期以来、台湾・台湾人が向き合ってきた孤児意識の隠喩としてしていると分析する。そして、国民のあいだに台湾人意識が台頭する1990年代に、二二八事件を経験し、孤児意識を強めることになった台湾人に向けて、浦実が母親の過去と自身の出自に向き合い、前へ踏み出す決意を固めるという大団円を迎える物語の結末からは、台湾人が抱え続けた孤児意識を形象化することで、李喬がこの作品を通して「孤児意識からの脱却と克服」（72頁）を強く提言しようとする意図を持っていたことも明らかにした。

第三章は、李喬の代表作である『寒夜三部作』（1979 - 81）にみられる「物語の虚構性を重視する李喬独特の創作観」（89頁）がどこから生まれてきたのかを、アメリカ人作家フォークナーの影響から探ることを目的としている。

台湾では当初フォークナー作品の中国語翻訳は、その独特の文体による翻訳の難解さから、他の外国作品に比べると遅れていた。そのため、李喬は多くのフォークナー作品を、日本語訳を通して受容してきたという。李喬が受けたフォークナーの文学的影響について、著者は自伝的小説などを引用し、決して少なくないと述べている。とくに、『寒夜三部作』の物語舞台である「蕃仔林」は、フォークナーの小説に登場する架空の地理的空間「ヨクナパトーフア」から着想を得て、李喬自身の生まれ故郷である実在の蕃仔林をモデルに想像され、創り出されたとする。

一方で、著者は『寒夜三部作』において「蕃仔林」という土地を基盤とする共同体意識が誕生し、台湾・台湾人意識を構築していく過程が描き出されたのは、創作時期であった1970年代の社会的・政治的に変化によるものだと分析している。当時、創作に行き詰まりを感じていたという李喬にとって、物語の虚構化というフォークナー独特の創作手法が作家として開眼するのに大きく作用したのだと明らかにした。

第四章は、李喬の短編小説「小説」（1982）を安部公房の実存主義的作風から受けた影響を考察するものである。

「小説」は、「あの年」と表される日本統治期の太湖竹南事件と、「この年」と表される二二八事件を経験する主人公が、統治者が交代しても全く変わりなく抑圧され続ける不条理を映し出す作品として読まれてきた。最後に「ただ頭を振り続けること」で自己の存在を意識するようになる主人公の表象は、1960年代のモダニズム文学隆盛期の実存主義から受けた影響も無視できないが、安部公房の『砂の女』の影響が大きい。1968年に川端康成がノーベル文学賞を受賞したのを機に、台湾に日本文学が迎え入れられるが、安部公房作品はそれ以前に翻訳され、熱狂的に受容されていた。『砂の女』に描き出される砂と葛藤する主人公の姿に、台湾の人々は国民党体制下の現実社会における不条理や苦難の中に生きる自己を投影させたのである。さらに、李喬が実存的思想を「小説」という作品へと結実させたのは、1980年代に台湾社会の民主運動へと身を投じる中でのことだった。李喬は実存の問題を「自らの主体性を獲得するための有効な手段へ

と読み替え」(148頁)、読者に「存在の意義」を問い続けたのであった。

第五章では李喬の作品集『山女——蕃仔林故事集』(1970)に収録された初期の短編小説から、『寒夜三部作』の長編小説『孤灯』(1979)への展開について、台湾人の集団的記憶である太平洋戦争を描く物語の主題の変化に注目して論じている。

『山女』に収められた諸作品は、故郷の蕃仔林で直接見聞きした出来事を描く自伝的作品とみられており、太平洋戦争期の台湾民衆の飢餓や南方戦線へ出征する青年の姿が描かれる。一方、『孤灯』は戦争末期のフィリピンに動員された台湾の若者たちの姿を描く物語である。李喬は、台湾ですでに受容されていた大岡昇平『野火』や五味川純平『人間の条件』といった日本文学から大きな啓発を受けていた。とくに『野火』の影響が強かったが、戒厳令下の台湾文学界では、本省人作家が自身の太平洋戦争の記憶を描くことに制限があったことから、『孤灯』を「反戦文学」の視角から行うことで創作の隙間を埋めようとしたのだとし、植民地統治下で戦場へと追いやられて犠牲となった台湾人青年男女の姿を書き残し、悼むことを重視したのだと結論づけた。

第六章は呉明益の『睡眠的航線』(2007)と『單車失窃記』(2015)における太平洋戦争の記憶描写をめぐる論考である。

戒厳令が解除され、社会全体が台湾本土化へ向かう中、日本統治時代を語ることが比較的容易になり、2000年以降はそれまでの世代とは異なる物語が誕生している。新しい世代の代表的作家である呉明益は、父親の遺品整理の際、父親が元少年工であったことを初めて知る。そこから父が一度も語ることもなかった過去へと追憶することで、父の半生を理解し共感しようとするのだった。

『睡眠的航線』では父親の失踪事件を機に、現在の「わたし」とかつて元少年工として日本に渡った父の物語が展開され、『單車失窃記』では失踪20年後に見つかった父の自転車めぐり、自転車がたどった経緯が、旧日本軍の南方進出の記憶とともに描かれる。戦争を経験しない呉明益が、太平洋戦争の記憶を描くことによって目指したのは、「世代間にまたがる戦争経験の空白を埋め」(216頁)ることと、「後代へと不戦の意思を伝えようとする表現」(同頁)だと著者は分析する。

第七章は、楊富閔の短編小説集『花甲男孩』から21世紀の台湾における郷土文学をめぐる様相について考察するものである。

郷土を描き出す「郷土文学」について、台湾では日本統治期から戦後に至るまで、その定義をめぐる論争が何度も展開されてきた。2000年以降も郷土を描く作家は数多く現れていたが、著者は楊富閔ほど「現代の台湾農村の姿を仔細に描き出すことができる者は決して多くなく」、「彼独自の作風」(239頁)を確立していると述べている。その作風の特徴とは、故郷である台南の農村地帯である「大内」の風土や庶民の様子を描いているものの、現代的な物語展開を描き出し、台湾語の口語体や台湾華語を大量に入れ混ぜ、1990年代から2000年代の台湾語歌謡曲をタイトルや作中に何度も引用していることなどを挙げている。つまり「新世紀に登場し、従来の郷土文学とは異質の作風で郷土を描き出す小説」(243頁)として、著者は楊富閔の作品を「新郷土小説」と定義づけた。

本章のもう一つのポイントは、『花甲男孩』を原作として、収められた短編から大幅に改編さ

れたテレビドラマ『花甲男孩転大人』にも言及していることだ。原作にはないベトナム出身女性が、主人公の祖母の介護ワーカーとして住み込みで長年働き、祖母が亡くなるまでずっとそばに寄り添う存在として描かれる。このような現実には社会で差別や虐待を受け、蔑視されることの多い外国籍労働者という「他者」を家族内に含めたストーリー展開は、「社会の内側に取り込もうとする台湾人視聴者に対する言説」(249頁)として機能したと著者は評価し、それは「新たな郷土想像の一場面」(同頁)であると結論づけている。

第八章は、「移民工」と称される東南アジア諸国から台湾への出稼ぎ労働者や「新住民」と呼ばれる外国籍配偶者の現実を描く文学と映画についての論考である。

移民工や新住民が増加し続けている台湾社会において、「移民工」は現実の台湾社会では「外労」などと呼ばれている。そうした呼称を改めるよう求める「正名運動」が引き起こされるなど、2010年前後に、各種権利向上を目指した動きの中で、社会の周辺に追いやられていく当事者たちの声を擲り上げるために、台湾で主要な東南アジア諸語紙『四方報』にて「投書欄」が連載される。そこには身の上の不遇や雇用主の不法行為に関する告発などが間断なく寄せられ、その投書を集めて編訳した作品は『逃』『離』というタイトルで単行本化された。それ以前にも当事者たちが声を上げる場として官製文芸コンクールなるものが行われていたが、応募者の対象資格に制限が設けられていたため、『四方報』を創刊した張正が民間の「移民工文学賞」を創設するに至った。本章では第一回の大賞作品である「他郷之夢」などが紹介され、移民女性が日常的に経験する現実問題や、台湾社会が向ける蔑視の眼差しなど多くの社会的議題が表現されているとする。他方で、佳作作品の「夜裡の日記」では本国で困難な境遇を抱えて渡台し、雇用主からは冷遇を受けるなど過酷な状況にある移民工が、隣人の手助けにより救われるという描写が出現していることを著者は指摘し、抑圧され虐げられる存在であった移民工や新住民たちが、「台湾人の手によって包容されていく物語展開」(269頁)を生み出していることを明らかにした。

また、フィリピン語の台湾映画『台北星期天』は、台湾人に移民工に対する意識を再考させる機会を持たせたというが、フィリピン出身の移民工が台湾社会で偏見の目で見られ、誤解される場面には台湾人の彼らに対する無意識な差別感情が映し出されていることなども指摘された。

以上、本書について、取り上げられたテキストを中心に概要を整理した。著者が「はしがき」で述べている通り、8章はそれぞれ独立した論考であり各章の最後に結論が提示されているため、終章は設定されていない。第八章の後には20頁にわたり「主要参考文献一覧」が付され、「あとがき」へと続く。

第2節 本書の特徴と意義

ここまで紹介したように、本書を通読すると、文学作品がいかにか台湾近現代史の歴史的展開と密接に結びつき、作家たちが社会の変容に応じて物語を想像し、創造してきたのだと知ることができる。著者の論考はすべて、作家の文学創作を取り巻く政治・社会状況、文学界の動向、そして作家自身が言及する創作意識などを根拠として展開され、非常に説得力をもつものだ。

張文菁 著

『通俗小説からみる文学史—1950年代台湾の反共と恋愛—』

法政大学出版局、2022年、292頁

通俗恋愛小説ができるまで—台湾の人々の読書史に一石を投じる—

松崎 寛子

はじめに

台湾の通俗小説と恋愛と聞けば、多少なりとも台湾文学や台湾映画史に興味を持つものであれば、真っ先に瓊瑤の名を頭に浮かべることができるだろう。評者が台湾大学に留学していた2000年代には、私の周りで瓊瑤ファンを自称する同世代の友人はいなかったが、その後アメリカに留学し、中国からの留学生に出会うと、小さい頃に瓊瑤の映画やドラマを見て育ったという人たちが少なからずいることに気づいた。特に親しかった中国人留学生カップルからは、彼らの結婚パーティで新婦が小さい頃によく聞いて母親と一緒に口ずさんでいた『一簾幽夢』の主題歌をヴァイオリンで弾いてほしいというリクエストを評者は受けたことがある。ちなみに『一簾幽夢』は瓊瑤の1973年の小説で、1975年に映画化、1996年に連続テレビドラマ化され、どちらも台湾とほぼ同時期に中国大陸で放映され、映画もドラマも同じ主題歌を採用している。本書238頁によれば、「80年代に入ると、瓊瑤小説を原作とする映画の興行成績は下降の路線を辿った。言わば、瓊瑤人気の失落である・・・中略・・・一方で、中国大陸ではこの時期から瓊瑤の一大ブームが起こっている」。1980年代生まれの友人も、まさに中国大陸での瓊瑤ブームの中で育ったのだろう。

本書は、瓊瑤をはじめとする恋愛小説—それは武俠小説と人気を二部した通俗小説であった—が、60年代台湾に隆盛する下地となる娯楽性の高い小説として50年代台湾の図書市場の発展につながっていったことを明らかにするため、これまで埋もれてきた当時の雑誌・新聞・単行本を大量に発掘、整理、閲読するというダイナミックな作業を通じた力作である。本書は、葉石濤や彭瑞金、陳芳明等の研究者たちが築き上げた台湾文学通史において、50年代は反共文学、60年代はモダニズム文学という区分の中で、通俗小説に関する論述が欠けていることを指摘する。60年代の古龍の武俠小説や瓊瑤を代表とする恋愛小説といった通俗小説が、台湾の人々の文化的な想像力に対してモダニズムなどの純文学以上に大きな影響を与えているはずであり、戦後台湾の文学史において、通俗小説の形成と発展に注目することの重要性を提言している。

本書の構成

本書の構成は以下のとおりである。

- 序章 台湾文学史における 1950 年代
- 第 1 章 戦後初期の文化状況
- 第 2 章 禁書政策と中国語図書市場の形成
- 第 3 章 戦後初期の言語転換と台湾人読者
- 第 4 章 新聞「副刊」と通俗小説の勃興
- 第 5 章 1950 年代初期における文化政策と雑誌の発展
- 第 6 章 反共文壇の分化と通俗図書市場の成立
- 第 7 章 通俗恋愛小説がジャンルとして確立するまで
- 終章 通俗出版が彩った 1950 年代の台湾

第 1 章では、日本による 50 年間の植民地統治が集結して、台湾が中華民国の一省として「光復」し、一転して今までの共通語であった日本語の出版物が姿を消したドラスティックな言語転換の状況を検証しながら、戦後直後に刊行された日本語雑誌『新新』を丁寧と追いつつ、当時の台湾社会の言説を拾い集め、論調が変化していった過程を分析する。1945 年の終戦直後から 1947 年の二・二八事件までの間、台湾では、新しい時代と祖国を迎え入れる台湾人の熱い思いから、雑誌の出版ブームが起きた。雑誌『新新』もその一つであり、創刊号の「国軍を台北駅頭に迎ふ」は、1945 年 10 月 18 日に進駐してきた中国軍を青天白日旗を振りながら歓呼で出迎えた台北民衆の姿を描いたものとしてよく知られている。一方で、急速に行われる脱日本化政策や中国人としてのアイデンティティが尊ばれる社会風潮の中で、当時の台湾人のアイデンティティの揺らぎと台湾社会の葛藤が反映された文面も紙面を占めていたという。しかし、創刊から 2 ヶ月たって刊行された第二号からは、論調が一変する。接收にまつわる腐敗を目の当たりにし、陳儀新政権に対する失望感、中国大陸出身者の台湾民衆に対する「認識不足」に対する不満が文面に目立つようになる。そして中国大陸出身者が台湾人を日本統治の「奴隷化」に甘んじた人々とする論説にも反論するようになり、そうした論調の中で知識人の間に台湾人としてのアイデンティティが芽生えていったという。そして『新新』には、日増しに累積する台湾人の不満を代弁する政治風刺小説も登場するようになり、陳儀政府の腐敗を風刺することによって、娯楽性を生み出し、大衆誌としての独自色を出していた。

一方で本書は、『新新』の編集後記の分析から、戦後直後の経済の混乱からくる出版経費の高騰が、言語政策の転換とともに読者の活字離れの原因になったことも指摘する。そして 1947 年の二・二八事件が起きると、『新新』をはじめとする多くの雑誌が停刊し、台湾人が活発な議論を交わすことのできる媒体は消えてしまったのである。『新新』に反映された当時の台湾人の言説から、台湾アイデンティティが二・二八事件より前にすでに芽生えていたという本書の指摘は、台湾のアイデンティティの問題を考える上で注目に値するだろう。

第2章では、1950年代国民党政府が台湾の「中国化」「反共」政策の中で実施した禁書政策がいかに凶書市場、さらに通俗出版に影響したかを検証している。戦後初期に国民党は日本語図書の差し押さえをかなり早い段階から行い、1940年代初期に台湾で形成されていた日本語の凶書市場は50年代初期には壊滅的な打撃を受けた。中国大陸より教育関係者、作家や文化人も渡台し、文壇でも反共文芸の政策を普及させるために「中華文芸獎金委員会」や作家団体の「中国文芸協会」が創立したのは、台湾の文学創作と出版の担い手が交代したことを意味する。1950年代初期の台湾凶書市場で流通していた書籍は、雑多な状況にあり、国民党政府は思想の統制のため規制に乗り出した。「反共」の名の下に、禁書に関する法令が次々に出されるが、基準は曖昧で禁書の審査は追いつかず、書籍の内容を吟味し審査するのではなく、迅速に取り締まりを優先するために「作家」が対象とされたことで、ほとんどの30年代中国新文学作品をはじめ、禁止された作家が関わった研究書、参考書、辞典、翻訳書まで、台湾に流入した中国大陸出版の書籍の大部分が取り除かれた。こうした禁書政策によって台湾の凶書市場に空白が生じるが、一方で、戦後の1946年より開始された国民義務教育で台湾社会に中国語の読者が増え、通俗の読み物に対する需要も高まっていたのが1950年代であった。この隙間を埋めたのが、抜け道的な「偽書」であったが、検閲の目を潜り抜けた凶書を翻印した偽書だけでは新たに出現していた中国語読者のニーズには応えるのが難しかったはずだと本書は主張する。中国語のできる作家を発掘育成し、台湾の社会情勢や読者の需要に合った作品を創作させて商品化する流れが生まれ、どこにでも存在していた貸本屋では、50年代から通俗小説が流通していたという。厳しい禁書政策が、台湾における中国語の創作と凶書出版を誘発するきっかけとなったのである。

第3章では、50年代初期において、日本統治時代に生まれた台湾人(本省人)が中国語リテラシーを獲得し得たか、さらに発展しつつあった当時の中国語凶書市場で誰が読者となり得たかを解明している。50年代以降の台湾人は、世代的に中国語の識字層と不慣れな層に分断され、言語の転換にうまく順応できなかった青年・中年の世代、1950年の時点で15~16歳の日本語世代は、台湾人社会では経済を担う中堅的な存在であるにもかかわらず、中国語凶書市場では周縁化された世代であり、主要な読者になり得なかったという。50年代以降の台湾の読者層は、「出身の省籍」及び「世代」のシフトがおきていた。本書では、陳若曦、瓊瑤、三毛を例に、若い世代の中国語リテラシーの実情を説明している。そこから垣間見えるのは、戦後の混乱や言語転換により読書を諦めた上の世代の本省人との分断、知識階級で育つ外省人学生と本省人学生の中国語リテラシーと文化資本の格差であると同時に、凶書を購入して読むことは「非日常」であり、貸本屋、学校の図書室、公共の図書館が凶書資源を得られる場であったことである。

第4章では、市民が最も手軽に読むことができた新聞の「副刊」(文芸欄)に掲載された作品を通して、通俗小説が勃興していった経緯を検討している。1950年代、「報禁」という幾重もの制限に関わらず、特に『聯合報』は新聞の通俗化に努め、中流以下の読者の評判もよく発行部数を伸ばしていったという。初期の『聯合報』「副刊」に連載された、李費蒙と李敬洪兄弟による挿絵を多用した「凶画小説」は、西洋映画の一幕を切り取ったような挿絵が読者の支持を得たという。そのほか、林芙美子などの日本語作品やアメリカの雑誌『サタデー・イブニング・ポスト』

などに掲載された娯楽性の高い作品の翻訳も見られた。1953年に林海音が編集長に着任すると、短編小説、散文、料理のレシピ、育児、ジョーク、民俗、風物などのコラムが紙面を埋めるようになる。また、共産党を絶対悪として描く小説の構図は、勧善懲悪もの、探偵、スパイ、復讐、推理などのジャンルにおいて娯楽性を発揮し、反共の要素だけでなく、恋愛も織り交ぜた通俗的な読み物になっていった。人々が日常生活で親しんだ新聞副刊は、それほど政治性は高くなかった。その中でも目を引くのが、1957年に連載小説として登場した『千歳檜』であり、台湾人作家による台湾の風土を単純に描いた男女の悲しい恋物語である点が新鮮であった。50年代に『聯合報』「副刊」で連載された小説のうち、台湾は常に「中国」の一部として日々の新聞の中で繰り返し消費されていたことをこの作品は改めて認識させてくれるという。

第5章では、新聞の文芸欄と並ぶ50年代の文学活動の場として知られる雑誌を取り上げている。本書は文芸誌と総合誌を合わせた51誌を対象に、公的補助への依存度合いを分類し、反共文芸の束縛が及ばない娯楽性の高い総合誌の存在を浮かび上がらせた。『紐司（英語のNewsに由来する）』、『中国新聞』など政府の援助がなくても経営が成り立つほど売れ行きが好調な総合誌は、著名人のゴシップや政治、社会の事件の暴露、そしてセンセーショナルな見出しで見る人の購買欲をかき立てた。国民党の推進により始まった反共文芸雑誌は、政府による補助、要人との関係を利用した広告などがなければ維持できないほど経営は苦しく、雑誌の発行者は、読者の好みに迎合せず、国民党政府の意向を最大限に反映したものであり、いわば「読者不在」であった。一方で、読者の好みを意識した総合誌の流星は、政府の援助はなくても経営は成り立つ、という別の選択肢を示し、結果として総合誌は1950年代の娯楽誌として、通俗的な読み物を提供していたという。

第6章では、上記『紐司（英語のNewsに由来する）』、『中国新聞』に代表される娯楽性の高い読み物が、1954年の文化清潔運動以降、「エログロ小説」と非難され、中華文芸協会を通じてメディアで世論が形成され弾圧されたことで、文壇における雅俗の分化を促した経緯を解き明かし、文壇を追放されたことで反共文学の束縛から解放された総合誌出版が50年代後半に通俗出版へ変貌する過程を示している。反共の要素が入っていればエログロの要素であっても反共文学とみなされ、政府の審査においても容認されて、女スパイの色仕掛けというパターンで描かれた1950年代の反共小説は、エロティックな要素が多いという。文化清潔運動によって弾圧を受けた新聞社は、改心して反共文学の流れに加わるどころか、むしろ隠れ蓑だった反共要素を脱ぎ捨て、思う存分商業主義に走り、ポルノに加え、恋愛、サスペンス、ホラーなどの娯楽的な要素を全面に打ち出した小説を廉価で大量に売り、そしてそれが大量に消費されていった過程は興味深い。

第7章ではついに、通俗恋愛小説というジャンルが確立するに至るまでの過程を辿る。1960年代に一世を風靡した瓊瑤以前の恋愛小説はどういうものであったのか。そしてどのような作家がいたであろうか。本書によると、1963年に瓊瑤が『窗外』を発表して以降、通俗恋愛小説は台湾において武侠小说と肩を並べるほどの人気を誇るようになったが、通俗図書市場が成立した1956年以前に発表された娯楽性の高い小説を見ると、純粋に恋愛を主題とする作品はそれほど

多くないという。本書は筆者が集めた 1950 年代前半に出版された小説 18 作をその表紙絵の写真と共に紹介している。これらの小説の物語はスパイ、好色、暴露、復讐、ハードボイルドといった要素が主旋律であり、恋愛は周縁的な一要素にすぎず、多くの表紙絵が女性の身体を強調したデザインや官能的な女性を描いていることから、エロティックな要素が売り物であり、出版社側もその読者層を男性として狙っていたであろうことがわかる。

本書では、恋愛小説が専業作家の登場によりジャンルとして確立するに至る過程を見る上で、50 年代後半に現れた人気作家金杏枝の出現を取り上げている。興味深いのは、金杏枝の名前の変遷である。1956 年に刊行された『酒家女』では、主人公の台湾人女性の源氏名「紅嬌」の名を筆者名としており、「紅嬌」は専業の作家ではなく同作は作者の実体験をまとめた自伝だと編集後記で記している。2 年後に続編『酒家女』が出版されるが、その編集後記では、「多くの女子学生からファンレターが届いた」と記されている。1959 年文化図書出版会社は上記二冊を合本させ、書名を『冷暖人間』に改め、作者の名前は主人公の源氏名・紅嬌ではなく、紅嬌の本名の金杏枝に変更された。1961 年、さらなる続編が『冷暖人間・続』が出版され、前編の 16 章に続く 24 章が追加され、物語は両方合わせて全 40 章の大作となった。1965 年には『冷暖人間』をもとに映画が制作され、金杏枝は 1975 年まで数多くの著作を出した売れっ子作家となったのである。

紅嬌から金杏枝、『酒家女』から『冷暖人間』への変更から、文化図書会社の出版戦略が見えてくるといえる。文化図書会社は 1956 年に他にエロティックな要素を強調した小説を出版しており、水商売の女性を意味するタイトル『酒家女』も性的な描写を読者に期待させたと考えられる。しかし、台湾を舞台とした台湾人女性の視点から恋愛を描いた『酒家女』は、悲しい恋の描写に対する反響が大きく、特に女学生を中心とした支持があった。女性読者の恋愛小説に対する需要に気づいた文化図書会社は、1959 年にエロティックなイメージを払拭するためにタイトルを『冷暖人間』に変更し、作者名も源氏名・紅嬌から金杏枝に変更し、女性読者に迎合したのではないかと本書は提起する。出版社が女性読者を意識するようになったことは表紙のデザインからも考えられ、『酒家女』をはじめ 1956 年に文化図書会社が出版した小説は女性の体の曲線を強調したエロティックな要素を含む表紙デザインが多いが、『冷暖人間』をはじめとする 1961 年に同社より出版された小説は、影のある女性の横顔や視線が強調されている。このような変化は、恋愛小説の付加価値を高めただけでなく、女性読者にとって手に取りやすいものになっていったのだ。文化図書会社にとって、通俗恋愛小説は主要な出版物の一つになっていったことがわかる。

このようにして、通俗恋愛小説は一つのジャンルとしての地位を確立し、1960 年代の瓊瑤ブームの隆起、70 年代の開花と繋がる土台が出来上がったのである。

おわりに

以上を見ると、本書は、今までの 1950 年代の台湾文学への見方に一石を投じるものであるといえよう。文化政策、読者層、文壇、出版社側の思惑を、膨大な資料からそれぞれ丁寧に分析し、

笠原政治 著

『台湾原住民族研究の足跡——近代日本人類学史の一側面——』

風響社、2022年、344頁

松明を繋ぎ、道を照らす

宮岡 真央子

はじめに

ようやく、というべきであろう。本書は、著者が1997年から2016年までの20年間にわたり、日本順益台湾原住民研究会の機関誌『台湾原住民研究』を主な媒体として発表してきた12編の論文を取めた学術論文集であり、著者の台湾研究をまとめた初の単著書でもある。今日の台湾で「原住民族」と総称されるオーストロネシア語族系先住諸民族（以下、原住民族と表記）に関わる19世紀末から20世紀半ばまでの文化人類学的研究の歴史を主題とし、なかでも原住民族の分類の歴史を中心的な検討課題とする。

本書の出版に至る経緯は少々異例である。まず本書の刊行に先立ち、呉密察氏の声かけに応じる形で、2020年に著者の翻訳論文集『日治時代台湾原住民族研究史——先行者及其台湾踏査——』が台北の国立台湾大学出版中心から「台湾研究叢書」の26冊目として刊行された。この翻訳論文集の構成は、著者が「台湾で出版をするために新しく考え出したものであり、日本語による同じ内容の単行本が以前から存在していたというわけではない」（1-2頁）。その翻訳書刊行からまもなく、これに基づく日本語版の単行本としてまとめられたのが、本書である。ようするに著者の論文集が日本を飛び越して先に台湾において中国語版で出版され、それを追うように日本で日本語版が刊行されたという順を辿った。この四半世紀間、日本の原住民族研究を文字通り牽引してきた著者の研究の集大成が、著者の研究拠点である日本で刊行されたことを、後学の一人として大変嬉しくありがたく思う。

以下では、本書の構成と内容を概観したうえで、評者の理解に基づき、著者の問題意識を抽出し、本書の意義を挙げ、本書にも関連する新たな研究動向についても触れることで、ささやかながら書評に替えたい¹。

本書の構成と内容

本書は全5部からなり、第1部（第1章）が通史、第2部（第2-4章）が明治期の伊能嘉矩の研究、第3部（第5-7章）が大正期の森丑之助の研究、第4部（第8-10章）が昭和期の台北帝国大学土俗・人種学研究室²と馬淵東一の研究、第5部（第11-12章）が日本統治時代を通じて分類上の位置

づけが変転した南部の原住民族に関する事例研究、という内容で構成される。以下に目次を掲げ、各章の内容を概略しよう。

序

第1部 総論

第1章 台湾原住民族研究小史——文化人類学を中心に

第2部 先駆者 伊能嘉矩

第2章 伊能嘉矩とその時代——初期研究史への測鉛

第3章 台湾原住民族を俯瞰する——伊能嘉矩の集団分類をめぐって

第4章 伊能嘉矩の原住民族分類における諸種の資料源

第3部 森丑之助——忘れられた研究者

第5章 森丑之助と台湾原住民族の分類

第6章 師・友人・訪問者たち——森丑之助の研究を支えた人びと

第7章 佐藤春夫が描いた森丑之助

第4部 『台湾高砂族系統所属の研究』を読む

第8章 名著『台湾高砂族系統所属の研究』をどう読むか（前篇）

第9章 名著『台湾高砂族系統所属の研究』をどう読むか（後篇）

第10章 馬淵東一とエスノヒストリーの研究

第5部 ルカイ（魯凱族）研究史——南部山地住民の分類をめぐって

第11章 幻の〈ツァリセン族〉

第12章 〈ルカイ族〉の誕生以後

謝辞

参考文献／図表一覧／索引

第1章の原住民族研究の通史は、清国時代以前、日本統治時代、第二次世界大戦後の3節に分けて述べられ、なかでも戦後については、台湾と日本双方の学術界の動向が記される。初出が入門者向けの書籍だったこともあり、初学者にも大変わかりやすい学史概説である。

第2章は、伊能の原住民族の調査と研究の全体像を示す。伊能および同時代の鳥居龍蔵、森丑之助の調査研究が、欧米におけるフィールドワークに基づく人類学の成立と同時代の早期になされたものであったことを指摘する。第3章は、伊能が1897年の全島調査に基づき、栗野伝之丞との共著『台湾蕃人事情』で提示した種族³の分類と分布図に関する検討である。同書の画期的な意義は、「自力では到達できないほどの高さから原住民族の全集団を一望のもとに俯瞰する、という視点を初めて打ち立てたところにあ」り、それを効果的に示したのが分布図であったという（76頁）。伊能の分類法は後世にも大きな影響を与えたが、旧来の「生蕃」「熟蕃」区分の刷新という試みが徹底されないなどの問題点もあったと指摘する。第4章は、伊能嘉矩が『台湾蕃人事情』で示した原住民族分類における資料源、すなわち清国時代の漢語文献、イギリス人ジョー

ジ・テイラーの見解、田代安定と鳥居龍蔵の東部台湾の先行調査を丹念に論じる。

第5章は、森丑之助の原住民族分類を検討する。台湾総督府は、1910年頃より従来依拠した伊能による分類法に替わって森の分類法を採用したが、総督府と森の分類法には相違点もある。それらを比較検討するとともに、森には平埔族への関心が乏しく、種族の分類が大雑把であったなどの問題点も指摘する。第6章は、不明な点も多い森丑之助の人物像について、鳥居や田代のほか、総督府の専門家や技師、在台ジャーナリストら多岐にわたる人脈から浮かび上がらせる。第7章は、作家の佐藤春夫の諸作品から2人の交流と晩年の森について描出する。

第8章と第9章は、台北帝国大学土俗・人種学研究室による大著『台湾高砂族系統所属の研究』（以下、『系統所属の研究』）に関する研究である。同書は教授移川子之蔵、助手宮本延人、卒業生／囑託の馬淵東一という3人体制で実地調査と執筆を分担し、原住民族を9分類し、この分類法は戦後の台湾の行政や学術界でも長く用いられた。ただし3人の記述箇所には「質や精度に関して少なからず差異が見出され」、同書の評価にはそれらについての理解が重要だという（202頁）。第8章では3人の調査地と執筆の分担について、第9章では系譜と口碑という資料の3人各様の用い方について詳細に検討し、同書を読み解く際の注意点を喚起する。第10章は、『系統所属の研究』の4分の3を占める馬淵東一の記述とその20年後の長編論文「高砂族の移動および分布」（馬淵 1954、1955）に関する研究である。両者ともエスノヒストリー研究だが、実地調査の資料を細部まで記録した前者と、文書資料を参照し、かつ平埔族との関係やマクロな社会動向にも考察が及んだ後者とでは性格が異なるという。『系統所属の研究』の分類法と同年に刊行された台北帝国大学言語学研究室の小川尚義・浅井恵倫の『言語による台湾高砂族伝説集』のそれとの相違、『系統所属の研究』における種族内部の分類や用語の錯綜についても指摘する。

第11-12章は、台湾南部の原住民族に関する日本人研究者たちによる分類の変転を論じる。第11章は、伊能が『台湾蕃人事情』で「パイワン族」と異なる種族として挙げた「ツァリセン族」（今日のルカイ、パイワンの一部に相当）が主題である。伊能は、1900年の南部調査で自説の不備を認め、「ツァリセン族」を「パイワン族」の一部に組み入れるという見解を日記に記したが、この自説の訂正を公表することはなかった。他方、森丑之助は伊能が分類した「ツァリセン族」も含めて「パイワン族」に一括し、それを総督府も採用したため、公式の種族分類で「ツァリセン族」は消えた。ただし、大正期の一部報告書、昭和期に至る一部行政担当者や現地駐在警察官の間では「ツァリセン族」の旧称も使われた。第12章は、昭和期の『系統所属の研究』において、「パイワン族」とは別の種族として「ルカイ族」が誕生した際の分類法について論じる。この「ルカイ族」という枠組みは今日まで用いられているが、他方で「パイワン族」と「ルカイ族」の文化や社会組織の同質性については、戦後の学術界でも議論がされてきた。これらを検討し、両者の同質性をどのように理解するのかという問題には、「まだ多分に検討の余地が残っている」と結論づける（305頁）。

本書の問題意識

序文には、著者が原住民族研究の過去に関心を向けるようになった経緯として、3つの出来事が挙げられている(2-4頁)。1つめに、著者は1980年後半に鳥居龍蔵と浅井恵倫の撮影した原住民族の写真の鑑定・復刻のプロジェクトに関わり、それらの写真集も刊行された。2つめに、台湾で1990年代以降に日本統治時代の記録や研究に対する関心が高まり、呉密察氏らによって国立台湾大学所蔵の伊能嘉矩資料の研究が進んだ。1998年に伊能の台湾研究を主題とする特別展が同大学で開催された際には、著者も開幕式で講演した(本書第3章はこの時の講演原稿をもとにしている)。3つめに、同じく1990年代から楊南郡氏によって伊能嘉矩、鳥居龍蔵、森丑之助の著作が台湾で次々と翻訳出版された。評者から付言すれば、その楊氏の仕事を日本の側で誰よりも理解し応援したのが他ならぬ著者だった。その後に著者は、楊氏による森丑之助の評伝を中心として単行本『幻の人類学者森丑之助』を編集し日本で刊行した(本書第6、7章の初出は同書)。このような経緯を概観すれば、本書で著者自身は決してそのような言い方をしていないのだが、1990年代以降の台湾と日本における過去の原住民族研究への関心の高まりという潮流において、著者は一貫して中心的な位置にいたことがわかる。

上記の3つの出来事の少し後、今世紀に入る頃から、台湾では「9つの原住民族」という『系統所属の研究』以来の分類法に対して、異議と単独の民族としての承認を求める声が次々に出され、それが認められるようになった。その結果、周知のように2023年3月時点で16の原住民族が政府に承認されている。本書で著者が原住民族分類の変転の経緯を詳細に論じたのは、このような原住民族社会の趨勢を背景とする。以下の一文は、原住民族分類の問題に取り組む著者の見解を端的に表現している(59-60頁)。

分類や名称の問題は、たんに学術上の関心や統治行政上の要請という点で重要なだけではない。原住民族の分類というのは、これまで原住民族と外部世界との間に繰り返されてきた相互交渉の、いわば函数なのであり、過去における分類の変転は、現在の人々が保持するアイデンティティのあり方にもさまざまに結びついているはずである。

また別のところでは、この主題に取り組むようになった動機を次のようにも述べる(5頁)。

日本統治時代に遡って原住民族の分類が移り変わった経緯を探っていけば、そのような現代の動きを理解する上で欠かせない視点を得られるだろうと考えたのである。

つまり著者は、まず今日の原住民族のアイデンティティやエスニシティへの関心を抱き、それと日本統治時代の研究とがどのように関係するのか、という問題に大きな関心を払ってきた。そしてそれゆえに、過去の原住民族の分類に綻びや問題点があるのであれば、研究者としてそれを明らかにしておく必要があるという問題意識をも抱いていることは、本書の端々からうかがえる。

また、2000年代になって『系統所属の研究』や「高砂族の移動および分布」が同じく楊南郡氏により翻訳刊行された。第4部はそのことを念頭に「古典的著作の分かりにくさを少しでも解消するとともに、本文の中に見出される様々な問題や、移川、宮本、馬淵の分担執筆から生じた記述の不揃いなどを指摘すること」を趣旨として、「これから同書を利用するときの一つの参考に」なることを期待して書かれた(234頁)。つまり、日本統治時代の研究が今後も読まれるとすればいかに読まれるべきか、という点に対しても関心と責任感を抱き、これらの「批判的読み方」の一端を読者に示そうとした。このような意味で、本書は過去の研究史を主題とするが、それはきわめて現代的な問題意識に基づいてなされた研究なのである。

なお、著者は本書に収録された諸論文の他にも、原住民族の分類に関する論文をいくつか刊行している。参考文献欄に挙げておくので、適宜参照されたい。

本書の意義

以上をふまえ、本書の意義を3点挙げておきたい。

1点目は、まず何より、本書が今後の原住民族研究者や原住民族にとって手引き書の役割を果たしうるといふ点にある。

日本統治時代の原住民族分類を検討する研究は、過去にも存在した。馬淵東一の1954年の論文「高砂族の分類——学史的回顧——」である。著者が原住民族の分類を研究する際には、この論文を「つねに念頭に置いてきた」という(4頁)。本書において著者は、馬淵がかつて整理し、また馬淵自身がその分類史に残した足跡を辿りつつ、馬淵をはじめとする従来の研究者が誰一人として指摘してこなかった多くの問題を丹念に拾い上げ、提示した。ほんの一例を挙げれば、伊能嘉矩の「平埔族」認識(第3章)、森丑之助の「化蕃」という語の用法(第5章)などである。また、上述したように本書の第4部は、まるごと大著『系統所属の研究』や馬淵の「高砂族の移動および分布」を読む際に注意すべき問題点を論じたものである。本書はつまり、今後、伊能や森の著作、『系統所属の研究』、そして馬淵の研究を紐解く際に手元に置いて読むべきものとして、著者に続く研究者および台湾社会に対して提示されたものと理解してよいだろう。本書の帯に記された「松明」という表現を借りれば、伊能嘉矩、森丑之助、馬淵東一が繋いできた原住民族研究の松明を受け取った著者は、その松明で過去の原住民族研究の来た道を照らし出した。そして、著者に続く後学の者たちへとその松明を繋ごうとしている、といえそうである⁴。

2点目は、本書が日本の人類学史の研究として優れた模範となるという点である。本書のサブタイトルが示すように、本書の研究は台湾を対象とした日本の人類学史の一側面を詳細に検討した研究でもある。日本の人類学界(文化人類学界)では、近年に至るまで学史研究において欧米のそれへの関心が主流を占めてきた。もちろん日本の人類学史についても、これまでいくつかの優れた論文集や著作が刊行されている。しかし、そのなかで特定地域(台湾)を対象としてなされた特定の主題(民族分類)に関する複数の研究者(伊能・森・馬淵)の間での学説の変転、相違、それらの相互関係を明らかにした本書のような例を、評者は寡聞にして知らない。本書が日

本の人類学史研究にとっても重要な著作であることは疑いようがない。

さらに3点目として、原住民族研究の歴史の議論を、植民地主義研究とは異なる次元で展開したという点も本書の意義として挙げておきたい。

1990年代から今日まで、伊能嘉矩ら過去の原住民族研究者とその研究をめぐっては、植民地主義研究、あるいは植民地主義批判の思潮のなかで多くの議論がされてきた。著者はそのような研究にも目配りをしつつ、それとは多少とも異なる次元で検討を重ねる。例えば、伊能嘉矩が『台湾蕃人事情』で「開化・漢化の程度」あるいは「発達の順序」という基準によって種族を序列化したことについて、これまで複数の論者が批判してきた。他方、著者のこれに関する第3章での議論(89-90頁)を要約すれば以下ようになる。伊能の種族の序列化において、北部山地に居住するアタイヤルが最低位に置かれるが、そこでは全体の半分近くの種族への言及がなされておらず、序列化としては明らかに不完全なものでしかない。また同書の結論は大部分がアタイヤルに関する内容で、「最も低い序列」がことさらに強調されている。当時の日本人にとって大きな脅威となるアタイヤルに対して、伊能もまた特別な関心を寄せていた。『台湾蕃人事情』は「蕃人教育施設準備に関する調査」を命じられて行った調査の復命書であり、そのなかでアタイヤルに対しては、(他の種族に設けるべき初等学校とは異なる)「適当なる特別機関」の設置を具体的に提言し、特別な存在と見なした。「伊能が示した種族の序列化は、そのようなアタイヤルへの認識と深く関連していたと解するべきであろう」。

ここで著者は、伊能の「種族の序列化」に対する従前の批判を否定したり批判したりしているわけではない。別の箇所では、著者も伊能にはたしかに進化主義的な他者認識があったことを指摘している(59、64頁)。しかし著者の議論は、それをもふまえた上で、さらに伊能の記述を、その調査研究が行われた歴史的・社会的文脈に戻して理解しようとする方向へと向かうのである。このような検討と思索の蓄積により、過去の研究史についてより多くの新たな理解や議論も開けてくるはずだと評者は期待する。

おわりに

本書を読み、評者は著者から後学の一人として多くの宿題を与えられたように感じた。本書のなかで著者が「今後の研究を俟ちたい」と記した問題はいくつもある。原住民族研究に従事するものは、これらの宿題を今後の自身の研究課題ともなうであろう。そして、新たな資料の発掘や解析がそれを可能にしつつあることにもここで触れておきたい。

本書に収められた論文は、2016年までに執筆された。その後、台湾原住民族研究の資料をめぐる状況はまた新たな段階に入った。近年、田代安定の手稿を納めた田代安定文庫が国立台湾大学図書館でデジタル公開され、また鳥居龍蔵のフィールドノートも徳島県立鳥居龍蔵記念博物館によってデジタル公開された。田代文庫の整理と解析を担った陳偉智は、伊能嘉矩の研究に続き、田代安定の研究をも手がけている(陳偉智 2020)。また評者は、鳥居の第1回と第2回の台湾調査における田代安定の関与や協働について、鳥居のフィールドノートをも参照しながら先ごろ

鈴木賢 著

『台湾同性婚法の誕生——アジア LGBTQ + 燈台への^{みち}歷程』

日本評論社、2022年、354頁

相互承認と法認への道程をたどる

—「家族 / コミュニティという二重の共同性」に着想を得て—

宮畑 加奈子

本書の構成

はじめに

第1章 「同志」の誕生と台湾社会

第2章 「同志」運動の生起

第3章 制度化される「同志」

第4章 同性婚から「婚姻平権」へ

第5章 自治体パートナーシップという「突破口」

第6章 婚姻平等をめぐる民意

第7章 蔡英文政権誕生と民法改正案

第8章 大法官解釈までの道

第9章 大法官七四八号解釈の論理

第10章 国民投票による決戦

第11章 特別立法による制度化

第12章 同性婚法の内容と残された課題

第13章 ポスト同性婚と台湾社会のゆくえ

おわりに

はじめに

2019年5月24日に台湾で施行された「司法院釈字第七四八号解釋施行法」は、アジア初の同性婚を法認した事例として台湾社会の多様性や人権尊重の現状を瞬く間に世界に喧伝した。本書は、その歷程と施行後の社会変容まで網羅した著者渾身の一冊である。

本書の著者、鈴木賢氏は、日本を代表する中国法・台湾法の権威であるが、その研究活動は家族法を起点とし、長年の蓄積が本書の出版に結実していることをまず確認しておきたい。家族法分野で長年研究支援を行ってきた日本加除出版の尾中郁夫家族法學術奨励賞を博士論文『現代中国相続法の原理』により、また本書により第35回尾中郁夫家族法學術賞（2023）を重ねて受賞した事実にもその一端が示されている。ただ専門書でありながらも、一般書と學術書の間地点を念頭に幅広い読者層に読まれることを企図して書かれており、思いのほか平易な文章で綴られている点も特徴の一つであろう。一連の社会運動の過程もあたかも実況中継のような臨場感溢れる描写となっており、著者の社会変革に寄せる熱意とともに台湾社会の体温すら感じさせる稀有な法律書でもある。以下では、制度をつかさどる法の領域を顕在化させる手段として、大澤真幸、木村草太、山本理顕「家族の成立 コミュニティへの飛躍」による社会学的考察を複線とし、本

書で頻出するキーワードを引用しながら、共同体の承認、社会的連帯、権力分立という視点から対話を試みたい。

1 「同性恋」から「同志」へ

第一章では、従来は社会の中で不可視化されマイナスのイメージを伴う言葉であった「同性恋」(同性愛)が、「同志」という孫文由来の言葉に置き換わる過程が香港や台湾の映画祭や文学作品の事例とともに示される。華人社会の伝統である儒教の血縁主義や家父長制を背景とした台湾「同志」の生きづらさの根源が、異性婚による「伝宗接代」(子孫の延続)の強制であることについても、「成家立業、結婚生子」(一家をなし、結婚して子をもうける)などの成語とともに提示されている。家父長制については、山本理顕の言葉を借りれば、以下のように捉えることも可能であろう。

…家族が自然だと定義することで、家族によって構成される社会も自然だとする理論は社会を支配する側には好都合です。家族における家長支配をそのまま社会に適用すれば一元的支配が可能になる。

戦前の日本のイエ制度もまた一元的支配を可能とした制度として機能していたことが想起されるが、華人社会の子をもつことへの家族内圧力については、評者もまた台湾在住時に度々聞き及んだ事象である。台湾社会の家父長制的な異性婚主義の根強さについては、政府データや同性婚をめぐる国民投票のデータを駆使して本書の各所で論じられている。このような状況を背景としながら成立した台湾の同性婚制度は、個人の存在と性の複数性を抑圧しない共同体との両立を可能とする飛躍的な変化を伴うものであったことは言うまでもない。

2 言葉で議論するということと社会的連帯

第3章では、「薔薇の少年」事件を契機としたジェンダー規範への疑義が、法律の名称においても「両性」から「性別」への変更をもたらしたことが述べられる。言葉によって過去と切り分けられ、新たな意味を盛り込まれたのは「同志」の用語だけではなく、男女を表す「両性」から「性別」への名称変更によって、さらなる性の多元化へとつながる経緯と社会の多方面にわたる影響の大きさには、言葉のもつ物語化の力量が示されているようにも思う。用語に付随する概念上の劇的な変化を促すことによって、社会意識の変容に大きな影響を与えてきた点も本書では度々言及される。

この言葉による物語化とともに、台湾では決して珍しくはないデモ行進においても人々の連帯力と共感力の強さが示される。両者の相乗効果が触媒となり、市民運動が権利獲得の道筋を刻んでいく過程は、台湾の民主化の過程をも彷彿させる。弱き存在が結集し連帯することが社会の変革をもたらす上での原動力となることは、ウクライナのオレンジ革命など世界各地で数多く示さ

れてきたが、同性婚においてもまた同様の歷程が示されている。

3 台湾型の司法権の独立

では、同性婚の制度を可能にした具体的要因は何であったのか。その端緒となった台湾の司法制度について本書ではかなりの紙幅を割いて説明されている。

かつての司法院大法官審理案件法（2022年1月4日からと憲法訴訟法として施行されている。）による違憲判決は台湾の民主化において極めて重要な役割を担ってきた。当初は国民大会、立法院、監察院の三つの機関からなっていた国民代表機関について、現在のような立法院のみがその機能を担うものとしたのも、また民主化の推進、人権保障の深化につながる憲法改正を実現させた誘因となったのも、この大法官解釈が契機であった。同性婚の法制化についても大法官第七四八号解釈が突破口となった点は本書第八章以下に詳細に述べられている。これに対して、日本の国会では「わが国の家族の在り方の根幹にかかわる」という常套句が繰り返されるばかりであることと、司法においても（本書が書かれた時点では）札幌地裁判決に至り現行民法などの規定は法の下での平等を定める憲法14条1項に反するとする違憲判決がようやく示されるまでの経緯について本書では批判的に語られる。その後2022年11月には、家庭生活に関する「個人の尊厳」を保障した憲法24条2項について違憲状態であるとしながらも、法制度については立法裁量に委ねられるものとした東京地裁の判決が見られる一方で、本書の刊行後1年を経た現在も旧態依然とした状況は継続しており、国会での答弁でも同様の文言が繰り返され、与党内の反対意見も根強いままである。

このような日台間の差異についての考察も、名付けによる社会的効果、市民運動、政権与党による支持、司法制度の特質、台湾ナショナリズムなどのさまざまな側面から論じられるが、中でも大法官解釈が直接の契機となった要因として、台湾型の権力分立のかたちが大きく影響しており、台湾における司法権による極めて積極的な立法権への関与と国民投票をも凌駕する司法権の優越がみられる点についても本書には克明に記されている。

4 法認までの歷程

冒頭に掲げた対談中で、建築家の視点から日本の家族を見つめてきた山本理顕はまた、ハンナ・アレント『人間の条件』を引用しながら、コミュニティの中に組み込まれた家族はその共同性において相反する二重性をもつものであるとし、このような家族の二重性が制度化されるプロセスについて以下のように述べている。

… 一対の男女が家族と呼ばれるためには、そのカップルが単独でそこにあるだけではなくて、自分たちと同じようなカップルが身近にあるときのその相互関係と深く関わっているとします。つまり、「隣のカップルは自分たちと同じである」と相互に承認し合う必要があ

ります。さらにその相互承認を持続させるための公的機関による公認が必要です。…人間の家族は、他の家族との相互承認とそれの公的機関による公認によって初めて成立するのだと思います。

以上は男女を前提とした家族についての説明ではあるが、同性カップルにもそのままあてはめることが可能であろう。上記の引用はまた、一对のカップルに対する政治共同体の承認が、制度による承認の前提であることをも意味している。

山本の視点に加えて大澤真幸は、家族とコミュニティの二重性は日本のイエ制度にも存在したとし、個人と均質性との関係性について以下のように述べている。

…日本の「イエ」のことを考えると、どの層も直下の層と同一の関係を持っていて、どこにも、還元できない複数制が優位になる層がありません。つまり、それぞれの層においてまずは、均質であることが前提になる。…だから、イエは複数性を抑圧するシステムになりうる。そのような指向に基づいてつくられる法律は、戦前の民法のように、イエの中にいる個人に対して抑圧的なものになりやすい。

ここには、イエ制度に内包される均質性の重視により、均質性から外れる複数性と個人をむしろ抑圧するものともなりえることが指摘される。家父長性による社会の一元的支配とともに、家族とコミュニティとの距離は現在に至ってもなお均質性を前提とすることを示唆する内容ともなっている。

では諸外国ではいかなる経緯を経たのか。本書では米国で同性婚を認容した2015年のオーバーゲフェル判決に言及されるが、この判決の基礎ともなった婚姻する権利は、かつての異なる人種間の婚姻を禁じた判決を覆した連邦最高裁判所のラビング判決(1967)により確立された(但し、オーバーゲフェル判決の反対意見では、両判決の関係性は必ずしも同一線上にはないとする)。アメリカでの同性婚承認の過程については、NHKの「映像の世紀 バタフライエフェクト『運命の恋人たち』」(2023年3月13日放送分)でも同性婚を認容した判決で、このラビング判決に言及されたことが間接的に取り上げられていた。ラビング判決により、互いに愛し合うカップルの存在は「自然」であったとしても法規範によっては認められないことの矛盾点が指し示されたことになる。

また先に言及した権力分立についての米国型の特徴としては、司法権が立法権を積極的に抑制することを目的とした法律の無効化の機能などが挙げられるが、司法・立法・行政の三権分立と三権が相互に均衡抑制することの結びつきは必ずしも自明ではないこと、英国統治下インドの最高裁判所に付与された司法権による行政権・立法権への拒否権の事例、後に米国においても史的要因により一般的な理解による権力分立の均衡抑制機能と異なるものとなったことなどが先行研究により指摘されている(上村剛『権力分立論の誕生』)。台湾でも憲法訴訟による法律の無効化は、民主化の過程において絶大な効果を発揮してきたという特徴がみられるが、台湾の同性婚の

前野清太郎 著

『初期植民地台湾における「漢文」と統治』

東京大学東アジア藝文書院、2022年、59頁

新たな角度から「漢文」を通して日本統治初期台湾を読み解く

石井 周

はじめに

「知之為知之，不知為不知，是知也」。明治二十八年。台湾割譲。日本は台湾を「知って」いたのだろうか。台湾は日本を「知って」いただろうか。あるいは清朝は……。そこがどういう土地で、そこにどういう人たちがいて、どういう言葉を話し、どういう生活をしているのか、知っていたのだろうか。知ることとは分かること、分かることとは分けること、だとすれば、日本にとって新領土台湾には渾沌が生きていた。七竅を鑿つためには、道具が必要である。その一つが「漢文」だった。

本書は、日本統治初期の台湾について、主として地方志や各種の調査関連文書に書かれた「漢文」をもとに、日本の台湾統治政策と台湾人名望家の意識を考察したものである。

第1節 本書の構成と内容

本書の構成は以下のようにになっている。

はじめに——見られる帝国と「漢文」——

1. 日本、準備なき統治者
 - 1.1 清朝統治末期の台湾社会
 - 1.2 未知からの統治の出現
 - 1.3 応急措置的な「間接統治」の実施
 - 1.4 統治させながら調査する、調査させつつ統治する
2. 漢文地方志とその立場
 - 2.1 伝統的地誌〈地方志〉の編纂活動
 - 2.2 日本統治期編纂の漢文・和文地方志
 - 2.3 「序」「凡例」と編纂者たちの主張
 - 2.4 地方志編纂と「風俗」
 - 2.5 漢文地方志から和文地方志へ

3. 「漢文」的台湾統治の模索と消滅
 - 3.1 「漢文」行政の日本統治下における継続
 - 3.2 児玉・後藤体制下の権力の地域浸透
 - 3.3 新たな「漢文」的社会領域の出現
 - 3.4 公的領域から「漢文」の消失
4. 結論
 - 4.1 「漢文」使用と統治形態の変容
 - 4.2 記述・記録をめぐる未来

参考文献

あとがき

「はじめに——見られる帝国と「漢文」——」では、まず、日本による台湾植民地統治の初期において、共通言語たる「漢文」を介して被統治者が統治者の優位に立つ危険性があったと指摘される。ついで当時の台湾における使用言語の複雑さとともに、本書における「漢文」の定義が「正則漢文プラス官府文体」であることがしめされる。比較的狭義の「漢文」である。そして、植民地台湾初期（明治後期）における「漢文」使用の実態を明らかにしたうえで、日本統治開始後に伝統的形態で再編纂された地誌（地方志）および日本側に向けて書かれた台湾側の「漢文」をもちいて、「「漢文」を媒介にした統治者と被統治者の特異な関係の展開と消失のプロセス」（p.4）をみるという本書の問題意識が述べられる。

「1. 日本、準備なき統治者」は、後の章の考察にあたっての前提となる、歴史的あるいは社会的な背景を述べたものである。その概要を評者なりにまとめると次のようになる。

清朝統治期台湾において、名望家層（士紳、紳士、紳童。あるいは郷紳、社会リーダー層とも呼ばれる）は、中国大陸部とは異なり、自治機構化した「堡」の代表者「総理」として、各種の行政業務を取りあつかっていた。次章で取りあげられる地誌（地方志）の編纂事業とのかかわりでいえば、それぞれの地域における資料収集を担った。1895年に日本による統治が開始されたが、日本人は台湾の土地の状況に無知で、植民地統治の基礎知識すら欠けていた。しかも清朝官吏との行政の引継ぎもなく、まったくの資源不足、情報不足であったために、日本は「応急措置的な「間接統治」の形態」を作らざるを得なかった。そこで協力を求められたのが名望家層、主には清朝時代の自治的機構の責任者「総理」である。日本にとってほとんど未知の地ともいえた台湾の統治にあたっては、まずは何より各方面での調査が必要であった。そこで「総理」を台湾総督府の囑託として雇用し、彼らを介して調査を行い、情報収集し、台湾について知り、統治していったのである。これがつまり「間接統治」である。とはいえ、それは、名望家層が「一体何者であるかを同時に探るプロセス」（p.11）でもあった。まさしく「統治させながら調査する、調査させつつ統治する」（p.11）である。この経路を著者は4種に分けている。すなわち、①視察・巡視を元にした報告書、②警察官による直接調査、③台湾人名望家への諮問、④自治的機構を経由した調査である。なお、ここで日本人と名望家の媒介言語となったのが「漢文」（正則漢文、官府

文体)であった。また、次章で述べられる日本統治下における伝統的地誌(漢文地方志)の編纂は、③台湾人名望家への諮問、が主に生み出したものであった。

「2. 漢文地方志とその立場」から、本書の主眼となる考察が述べられる。「2.1 伝統的地誌(地方志)の編纂活動」では、まず地誌(漢文地方志)の編纂が名望家層にたいする籠絡・懐柔の一環であったとする従来の見解について、編纂期間の短さに加え、「そもそも地誌を現地語で編纂させることがなげゆえ籠絡・懐柔になりうるのか、との根本的な部分の説明」(p.15)がなされていないとして疑義を呈する。また、清朝時代の台湾地方志の編纂はほとんどが官修であったこと、それにあたって名望家に調査報告書「采訪冊」の提出が求められたことが指摘されている。「2.2 日本統治期編纂の漢文・和文地方志」では、日本統治期に編纂された漢文および和文地方志のあらましが述べられている。ここで、本書にとって重要で、また本稿にとっても必要であるので、下記に著者作成の一覧表を載せることをお許しいただきたい。

表 0-1 日本統治下で編纂された漢文地方志と和文地方志

		編纂開始年	備考
①『舊雲林縣制度考』	和文	1896年2月?	本文のみ
②『臺南縣志』	和文	1896年9月?	漢文序[磯貝静蔵、瀬戸晋、蔡國琳]
③『新竹縣制度考』	漢文	1896年8月	本文のみ
④『苑裡志』	漢文	1897年11月	漢文序[蔡振豊、蔡相]
⑤『新竹縣志初稿』	漢文	1897年12月	漢文序[鄭如蘭、鄭鵬雲・曾逢辰]
⑥『樹杞林志』	漢文	1898年3月	漢文序[木戸有直、林百川、彭裕謙]
⑦『嘉義管内采訪冊』	漢文	不明	本文のみ
⑧『安平縣雜記』	漢文	不明	本文のみ
⑨『臺北廳志』	和文	1903年3月刊行	和文序[菊池末太郎、台北庁総務課]
⑩『新竹廳志』	和文	1905年5月刊行	漢文序[祝辰巳、後藤新平]、和文序[里見義正]
⑪『桃園廳志』	和文	1906年5月刊行	和文序[後藤新平、竹内巻太郎]

注) 王世慶(1985)、吳密察(1997)および各書の序文より筆者整理。

(本書 p.18 より)

これらの期間は、「ほぼ台湾統治最初の10年間に重なっている」(p.18)。他には、⑨『臺北廳志』が増補・改訂されて1918年に再刊されたものだけであるという。本書では①から⑧までについての説明がなされ、著者は、次節「2.3「序」「凡例」と編纂者たちの主張」において、序や凡例、各項目冒頭の地誌論的部分から地誌編者の見解を読み解いていく。地誌の序や凡例には「しばしばそこからはみ出るような編集動機が記載されている」(p.21)からである。最初にあげられる例が②『臺南縣志』における台南県知事磯貝清蔵および編纂委員瀬戸晋それぞれの漢文の序文である。そこで、わずかに二文字の違いが目される。磯貝序における「紳衿耆老」と瀬戸序における「宿儒耆老」である。瀬戸序の「宿儒」は、「編纂に協力した台湾人名望家たちを、単に身分的に士人であるにとどまらぬ儒教的知識人(「宿儒」)であると積極的に位置づけるもの」(p.22)であり、「名望家からの意識と合致したもの」(p.22)である。その意識とは「地方志編纂への協力を、自らが儒教的知識人たる上での任務」(p.22)とすることであった。その裏付けと

して、地誌編纂に儒教的知識人の責任があると書かれた⑤『新竹縣志初稿』における鄭鵬雲・曾逢辰連名の漢文序、④『苑裡志』の蔡振豊漢文序が引用される。では台湾人名望家は、なぜ日本統治下において儒教的知識人として地誌編纂をする責があると考えたのか。それは主には「帝國の「政教制度」のもと人民の教化」(p.23)をすすめることを望んでいたからである。言い換えれば、これは「政教」への介入ということにもなる。

さらに「2.4 地方志編纂と「風俗」」において、地方志の本文注釈から、台湾人名望家の編者が施政に関して行った建言が読み取られる。④『苑裡志』典禮志では、日本人官吏による正月の祝いが「古制」等と好意的誤解のもとにとらえられた上で、行われていない儀礼をも行うよう求めているという。また「祠祀」に「未設」とあるのは「編者らが地方官衙に存在すべき、と考える項目」(p.25)だと指摘する。そして、⑦『嘉義管内采訪冊』を例に、「土習」の内容を「あるべき「風俗」、
「雑俗」の内容を「そこにある「風俗」とし、「地方志記述において編者たちは郷土の「そこにある」風俗をあくまで自身と異なる他者として描こうとした」のであり、あるべき「風俗」への教化のために「日本の初期の統治はむしろ好ましい方向性のもので受け止められた」と述べる(p.26)。このことは他の地誌における日本の教育制度への言及からもみることができるのであり、こうして「地方志編纂事業は、それまで資料収集者でしかなかった台湾在地の名望家らを編集執筆者の地位に引き上げてくれたのみならず、政治への参与への可能性」(p.27)を見せるものだったことが明らかにされる。とはいえ、政治参与への可能性というのは台湾人名望家の誤解でしなく、ここに日本側と台湾人名望家側のズレがみられるということになる。

最終節「2.5 漢文地方志から和文地方志へ」では、和文地方志の序や構成を通して、日本側の姿勢が読み解かれる。和文地方志では、旧来の漢文地方志にあった「學校志」や「選舉表」、「列傳」、「文徴」といった項目がなくなっており、著者は「地方志という記載形態そのものが、日本人官吏にとっては不要なノイズを少なからず含む、決して使いやすくない資料であった」(p.30)と述べる。また⑨『臺北廳志』が刊行された1903年以降の和文地方志は児玉源太郎・後藤新平体制の時代になっており、もはや1896～1898年頃のように台湾人名望家に「何を聞いたらいいか調べるために聞く」のではなく、すでに「調べることを指定して聞く」段階となっていた。評者なりに言い換えさせていただくと、台湾統治開始直後の模索期間を終え、日本側の全面的な主体性・主導性が積極的に打ち出されていった段階、といったところになるだろう。

「3.「漢文」的台湾統治の模索と消滅」では、まず「3.1「漢文」行政の日本統治下における継続」において、日本統治開始間もない頃の調査関係文書における「漢文」使用の実態が述べられる。台湾人名望家の書いた「漢文」は、一部の語彙以外は正則漢文に近いものであったが、日本側が文語体の正文を翻訳した副文の「漢文」は、官府文体であった。これに異議を唱えた日本人もいたものの、官府文体によって台湾側に指示をあたえることによって、「日本人らが以前の清朝を継承する新しい官府＝統治者であることが理解されたのであった」(p.37)。その後、児玉源太郎・後藤新平体制になると、こうした「漢文」の使用に変化が生じる。著者は「3.2 児玉・後藤体制下の権力の地域浸透」で児玉・後藤体制になって、「総督府が集権的に推進した巨大大業」(p.39)である土地調査・旧慣調査・戸口調査などの調査事業が展開されたことについて述べる。こうし

た調査事業は、各種の量的・統計的リソースを充実させ、「日本人官吏の出張報告書・復命書、台湾人名望家たちへの「漢文」諮問、旧「総理」を介した間接調査といった質的なリソースの価値」(p.41)を相対的に低下させることになった。つまりは「1. 日本、準備なき統治者」で述べられたような、「旧「総理」たちを仲介者にする応急措置的な「間接統治」」(p.42)の終焉である。では、「漢文」は台湾人名望家とともにどうなっていったのか。次の「3.3 新たな「漢文」的社会領域の出現」以降でそれが明らかにされていく。「漢文」と統治の関係は変容したが、それが「漢文」の使用を衰えさせたというわけではなかった。地誌や調査関係文書ではなく、詩社のネットワークや『臺灣日日新報』『臺灣教育會雜誌』等の漢文欄といったメディアに主な舞台が移っていったのである。その意味で、1905年の『漢文臺灣日日新報』、すなわち『臺灣日日新報』漢文欄の独立は示唆的である。とはいえ、「3.4 公的領域からの「漢文」の消失」で述べられるように、統治者としての自信の深まりと日本人官吏の「漢文」リテラシー低下が相まって、「漢文」の使用は限定的になっていく一方になった。1913年には「廢報廢止漢譯文廢止ノ件通達(各廳長)」が出され、官報(庁報)における漢文訳掲載が廃止されることになった。一方、著者は、台湾人名望家の視点にも注目し、「漢文」の使用を限定的なものにしようとする日本側の視線の変化に気が付いていなかった可能性があると指摘する。なぜならば、「この時期までの日本人官吏と、台湾人名望家たちの「風俗」あるいは「旧慣」に対するメンタリティには近似性があった」(p.48)からである。具体的にいうと、たとえば両者とも「淫祠」を排除すべきと考え、そうしたことを「迷信深い台湾人／迷信深い民」が行っているという点で認識(あるいはイメージ)が共有されていたということになる。その後、「漢文」使用の衰えとは逆に、日本語を習得したエリートたちによって、「新文学」が提唱されたり、自治・民権運動が展開されたりするようになっていくのであった。

最後に「4. 結論」で、本書での考察がまとめられる。日本統治開始当初から、統治体制を固めるためには、「漢文」を通じた台湾人名望家らの協力が必要であった。しかしながら、そうした応急措置的な「間接統治」の時期が終わると、台湾人名望家らの統治の現場における出番もなくなっていった。ただし、台湾人名望家らにおいては、「間接統治」の際の各種答申や資料提供、その後の新聞・雑誌の「漢文」欄での漢詩文投稿といった場があったために、それが「日本側によって管理・統御された空間」(p.51)であるにもかかわらず、日本の統治拡張のプロセスを「文化的な活動の場が広がったものであるような感覚」(p.51)でとらえていた。しかしながら、その後新しい台湾人エリート層は日本語を学び、日本語で思考するようになり、また日本人官吏は「漢文」リテラシーが失われていき、台湾人名望家の操る「漢文」世界に入り込めなくなっていったのであった。

第2節 本書の意義とコメント

本書のもっとも特色ある点は、何より日本統治初期台湾の地誌や各種の調査関連文書等における「漢文」を主たる考察対象としていることである。「漢文」と言われれば、漢詩文集や新聞、雑誌といったメディアのそれに主眼が置かれ、地誌や調査関連文書の記述が取りあげられること

は稀であろう。というのも、地誌や調査関連文書の内容は、単に事実が淡々と記載されているだけのものという先入見をもたれがちだからである。少なくとも評者はそうであった。しかし、本書では、地誌の序文や本文または注釈、各種調査関連文書等の内容を精査して、そこから意義のある記述を読み解き出し、台湾統治を「漢文」を通して眺めるという成果が生み出されている。

次に、評者の興味関心の観点から、若干のコメントを述べさせていただきたい。まず、「台湾人名望家」あるいは「台湾人名望家層」という概念について、今少し説明が必要ではなかっただろうかと感じた。すでに呉文星『日治時期臺灣的社會領導階層』をはじめとした多くの先行研究の蓄積があり、自明のことなのではあろうけれども、本書でも触れられているように（例えば p.27）、台湾人名望家もまたいくつかの層に分かれている（ただしその層も単なる科擧の段階によるものだけでは不十分で、思いつくままにあげるならば、日本統治への協力姿勢の程度、家柄、資産、地域など多角的に分類可能であろう）。そのため、台湾人名望家の各層を明らかにし、全体像を明確にしたうえで、「政教」への介入や政治への参与にたいする期待、もしくは彼らの「漢文」使用の実態等について論じた方が、より説得力を増したのではないと思われる。なんとすれば、本書でいう台湾人名望家層からあぶれた台湾人名望家もいただろうと考えられるからである。その意味で、もう一つ述べるならば、本書で名前が出た台湾人名望家の漢詩文の分析により、論を補強する内容を引き出すことはできなかったであろうか。漢詩文もまた多分にレトリックが散りばめられたものではあるが、それでも地誌の序文等よりは、比較的直截的にその意識や心情が表現されている可能性があるからである。もし散逸していないのであれば、その漢詩文についても論に組み込むことができるのではないと思われる。最後に、細かな点だが、本書における漢文地方志編纂が「台湾人名望家層」への籠絡・懐柔だという従来の見解にたいする問題提起（p.15）について、漢文地方志の読者という視点も必要であろう。仮に、漢文地方志の編纂において「台湾人名望家層」も読者とされていたとするなら、そこに籠絡・懐柔の意図を読みとることもできるからである。

とまれ、以上のコメントは、本書の論にかかわる周辺事項に言及してみたのみである。本書は、全 59 頁のブックレットという形ではあるが、洞察力に富んだ論が展開されており、著者のさらなる研究の発展が大いに期待される。

おわりに

評者はこれまで主として日本統治初期の漢詩文や伝統文学、そしてそれを取り巻く人々について関心を怠いてきたため、本稿も「漢文」あるいは漢文脈の視点を中心とならざるを得なかった。書名が『初期植民地台湾における「漢文」と統治』であるから、それでいいのかもしれないが、本稿を終えるにあたり、そうした枠組みを踏まえながらも、歴史学、社会学など多分野／他分野からの読みもまた可能であろうと感じたことを附記しておく。

なお、本書の最終節「4.2 記述・記録をめぐる未来」は、「最後に、いささか社会科学的な学問が対象とする「^{ザイエン}である」の分析からはみ出た「^{ズレン}すべき」議論を展開することを許してもらいたい」

